ある秘め事

自分は理性的な人間だと、ずっと信じて疑わなかった。
理不尽なことは嫌いだ。特に、自分がそうであることは、たとえどんな事情があろうとも許せない類いの人間だと思っていた。
道理で捩じ伏せられない感情があることを知った時、僕は自分を蔑み、嫌悪し――やがて憎むことに疲れてその現実を受け入れた。
ほんとうに、自分はどうしようもない人間だ。
それなら、せめて、その禁忌の部分は一生誰にも見せずに生きて行こう。
どうしようもない、くだらない人間というだけではない、美しい何かがまだ自分にあるのなら、僕はそれを選ぶ。選び続ける。
そこに、最低よりは少しましな人生がきっとあると信じるから。

長かった夏が過ぎて、このクィーンズベリでの四回目の秋がやってきた。
ordinaly level examを終えた僕等は、正式にL級生の仲間入りをしたとみなされ、教授達の僕等に対する接し方も目に見えて一人の大人に対するそれへと変化した。勿論僕等も皆その瞬間を楽しみにしてきたが、実際に体験する立場になってみると、なんだか妙にくすぐったい。けれど、それは、失敗もやり直しもほぼ無制限に許され、未来がどのようにも変化し得た時代が終わり、自らの決断に責任を持ち、否応なくその道を進まねばならなくなった事への対価だった。
新学期が始まるまでのほぼ二ヶ月、僕は殆どをフランスで過ごした。学校の誰とも合わなかった。ロンドンに戻ってすぐ、ポールにだけは、音楽科への転科を取りやめた事を電話で伝えた。ポールは、「そう」と一言呟き、それから、「残念だ」と言ったけれど、あまり驚かなかったようだった。きっと、ポールには、僕の選択が予め見えていたのだろう。
ミロに最後まで何も伝えなかった事を、僕は申し訳なく思いはしたが、悔やんだ事はただの一度もなかった。きっと、ミロはひどく傷付いただろう、そう思いはするし、実際にミロ以外の人間が誰かにそんな仕打ちを受けたら、僕はその彼を傷つけた相手を義憤と共に非難するだろう。けれど、ミロに対しては、自分でもおかしく思えるほど、感情が静まり返って波立たな

かった。酷い人間だと、自分を非難する気持ちはある。勝手にミロに思いを寄せて、それがかなわなかったからといって、どうしてミロが傷付かなくてはならないのか、と、自分を詰ることも出来る。けれど、僕がとった行動は、結局ミロの電話から逃げ続けただけだった。

八月も半ばを過ぎた頃、僕は漸く一通の葉書をニア・ソーリーのミロに宛てて投函した。最初は、葉書ではなく封書で、僕のミロへの裏切りに対する言い訳を三ページも書き連ねた長文だった。当初、文章は時に気味が悪いほど穏やかで、その三行先には酷薄とも受け取られかねない言葉が続き、そのまた後には奇妙に優しかったりして、とても不安定で人に見せられるようなものではなかった。三日間、毎日読み直してそのいびつな起伏をならし、漸く二枚の、それなりに客観的と思われる手紙にまとめ上げはしたが、僕は結局それを屑篭に捨てた。

こんな、どう考えてもミロを納得させられるとは思えない手紙を、送って何の意味があるのか。

僕は机の上に放り投げてあった葉書をとり、簡潔に本当のことだけを書いた。

祖母と南フランスを旅していること。

ミロとその家族、動物達が、楽しくやっていてくれればいい、と願っていること。

あの胸が痛くなるような新緑に彩られた、美しい風景の中で、ミロが僕の事などそんなに長く考えていられるはずもない、と思ったからだ。

最上学年のひとつ下、という学年に位置する僕等は、部屋も二人部屋になり、これまでに比べて破格の自由が与えられる。まず、上級生専用の談話室や小さなキッチン、冷蔵庫などの使用が可能になるし、門限、消灯時間も一応は決められているが、同室の人間が同意すれば午前零時まで延長できる。

僕の同室の相手がアイオリアだと知った時には、正直なところ、ベネット氏にやられたな、と思った。僕の予想はウォルトで、それはウォルトも同じだっただろう。丁度駅からのバスで一緒になり、ベネット氏の部屋の前で渡された部屋割一覧を覗き込んだ時、ウォルトも意外な顔をして僕を見たからだ。

「お前、リアと三年目？　そう頼んだのか？」

「まさか！」

慌ててそう否定して、言ってしまってから、これではアイオリアに申し訳ないな、と思った。

「いや、リアなら気心が知れているから、有り難いけれど。でもこれが最後の共同部屋だし、他の人とも組んでみたかったかな」

「そうだよな。普通は、あまり前年と同じ組み合わせにはしないもんだが……去年のお前んとこの三人部屋はミロを抑え込むために決まってるが、アイツがもう抜けたのに、何でだろう？」

ウォルトの疑問は的を得ていて、普通、僕等は連続して同室になることはあまりない。どんな相手とでもそれなりに上手く

やっていくのが、ボーディング・スクールで身につけるべき大切な技量の一つだから、スクール側はその機会を最大限に提供しようとするのだ。

けれど、勿論例外はあって、学生に問題があれば、ハウスマスターは極力その問題をうまく処理してくれる相手を同室に選ぶ。最近の例では、色々な意味で集団生活に慣れていなかったサガ先輩が入学時からずっとアイオロス先輩と一緒だった（それが六年次に厄介な問題を起こしてしまったのだが）。

僕等もまた、第四学年からずっと同室だった。それはウォルトの読み通り、ミロを御する仲間として組まされたのだろうが、ミロがいなくなった今、再び僕とリアが同室にされた理由は一つしかない。

リアの方に問題があるとは到底思えないから、つまるところ、僕自身が要注意人物としてマークされ、ミロの方はもう安全だと看做されたということだ。

腑に落ちないといった横顔で表を睨んでいたウォルトが、突如ぷっと小さく吹き出した。

「おい、見ろよ。ミロの奴、ポールと相部屋だ」

ウォルトの指先が指し示す先は、僕が実は自分の名前を見つけるより先に見つけていた一行で、僕はウォルトに苦い笑みを悟られないように言った。

「うん。そうなると思っていたよ」

「何で！　あいつら犬猿の仲だろ？」

「だからじゃないか？　二人共、結構食わず嫌いが激しいから。丁度二人で専科に転科したし、ミスター・ベネットも良い機会だと思ったんだろう。……それに、あの二人は、芯の部分ではお互いの音楽を認めている」

つい、言わなくてもよかった事を最後に零してしまった。ミスター・ベネットも、流石にそこまでは気付いていないだろうけれども。

ウォルトが少し目を見張った。

「……そうなのか？　まあ、ミロは結構そうかな、とは思うけど。ポールは……」

「ポールは、そういうところでは決して間違わないよ」

ポールがミロを評価していなかったら、彼の舌鋒はあんなものではすまないに違いない。僕とポールの目指す音楽はそれなりに近いところにあり、だからこそ、僕にはポールがミロに対して抱く感情も大体のところは想像出来る。

自分にないもの、どう足掻いても得られないものを目の当たりにした時、人が抱く感情は崇拝か拒絶か、ではなく、そのどちらもだからだ。

……僕の目指す音楽、なんて。

ふと、自分でその言葉の空しさに気付いた。

そんなもの、もう目指す日は二度と来ないのだ。

冷静に考えれば、ミロは結構沢山の人間に彼等の音楽に対する執着を見せていた。

最初はサガ先輩のヴァイオリン。それから、僕とポールのデュエット。そして、ジョシュアのピアノ。

ミロは、僕の変声前の声には形振り構わず執着を見せたけれど、それ以外のものにはあまり興味を持たなかった。入学した直後に、一度だけ、ピアノの練習をきいていていいか、と聞かれたことがあったけれど、その後僕のピアノに対する執着を見せたことは一度もない。

つまり、僕のピアノはミロが認めるレベルではないということで、そんな単純な事に丸四年も気付かなかったのは、僕自身が都合のいい未来を望むあまりに盲目になっていたからだ。

一番心の部分の音楽で、互いを認めているミロとポールは、結局ミロに認められる事のなかった僕とミロが組むよりよほど相性がいい。

もう痺れて感覚などなくなってしまったと思っていたのに、その言葉は冷たい刺のように胸を刺し、僕はそのまま、それじゃまた後で、と残して自室に荷物を引き上げた。

予想していた嵐は、それでも十分な唐突さでやってきた。授業開始ぎりぎりになってクィーンズベリに戻ってきたミロは、食堂で僕の顔を見るなり、音を立てるように蒼白になり、それから俯いて固まった。

僕は、見なかった振りをして視線をミロから外した。向こうから話しかけてくるまで、こちらからは声を掛けないと決めていたからだ。

アイオリアがミロの分の食事も取りのけて誘ったけれど、ミロはもうランチボックスを食べたから、とウィリアム・バンキンとマイケル・ガーネットが座っていた一角に席をとった。

彼が考えていることなど、三分も様子を観察すれば大体のことはわかる。けれど、その瞬間のことなら誰から見ても明白なのに、その次の行動となったら欠片も読めないのだ。

そのときも、全くその通りだった。

「……こんなの、要らない――――!!」

食後、どうやらミロは自分を避けるつもりらしいと合点して、それならそれで好都合、と納得しかけていたときだった。

いきなり部屋のドアがノックされて、眉を限界までつり上げたミロが戸口に現れた。

アイオリアは今年から別室になったミロを歓待したけれど、その言葉もミロの形相を見て途中から勢いを失った。

「答えろよ！　何で、何で黙ってたんだよ、専科になんか行かないって……お前、夏休みの前には決めてたんだろ？」

一体何が引き金になったのか分からないが、ミロは先刻の引いた態度を改め、今ここでこの夏中考えていたに違いない疑問のかたをつける気になったものらしい。

ミロが握りしめていたのは、僕が南プロヴァンスから送った

あの葉書だった。あんなに、普通の短い挨拶しか書いていない葉書の何がそんなに気に障ったのか。内容に問題がないのなら、ミロが怒っているのはその内容がないという事実だろう。なら ば、今ここで捨てた手紙の中身を披露してやろう、と僕は開き直った。

「決めていた、というより、ぎりぎりまで迷っていたんだ。自分で納得がいくまでやってみて、それで僕には向いていないと思った。夏休みの前には専科の合否はまだ発表されてなかっただろう？　だったらそれまで僕も言う必要はないと思ったんだ」

これを嘘だと言われても困る。実際、九割以上はその通りだからだ。迷っていたのも本当だし、決断出来なかったという事実がすなわち音楽家には向いていないということにほかならない。合否判定が出ていない段階で、自分はもう行くのを止めた、と共に受験した仲間に触れ回るほど、僕は無神経でもない。

けれど、僕がミロにそのことを言わなかったのには、確かにそれ以外の別の理由もあった。そして僕は、ミロがそれをまるで麻薬犬のような敏感さで嗅ぎ取り、残り九十九パーセントの真実の価値を全く顧みることなく、ただ一パーセントの不誠実を詰ることの出来る人間だと知っていた。

ミロには悪気はない。だから、それを責めるつもりはない。けれど、だからといって、素直にその隠した一パーセントを見せてやる義理もない。

そう固く決めてどんな追求にも揺らぐまいと身構えた時、思いもかけない方向から鋭い切り込みが入ってきた。

「納得の行くまで試すって言うのは、白紙の答案を出す事なのかよ？」

事のなりゆきが分からず、唖然とした表情で事態を見守っていたリアが、僕の方を凝視したのが分かった。

あきらかに、僕らしくない所行だと思ったのだろう。

思わず、口の中での舌打ちを歯を食いしばって堪えた。ミロはどうしてそのことを知った？　受験者の点数は、本人以外に知らせてはならないはずだ。一瞬、悲し気に僕を見ていたウェルナー教授の眼差しが脳裏を過った。

いいや、違う。あの人が、そんな事をするわけがない。

ミロは以前にも、教授以外知り得ないはずの秘密に辿り着いた――僕の、この胸の煙草の焼き痕のことだ。

どんな手を使ったかわからない、けれど、ミロは知りたいと思ったら何が何でも探り出す人間だった、と思い起こして、一瞬暗い感情が吹き荒れた。

そうやって、人の隠していることを興味本位で暴き立てて。

隠しているのは、そうしないでは正しいかたちを保っていられないからだ。暴くなら、そのあとに吹き荒れる醜い嵐に踏み込むことも覚悟すべきだ。

それなのに、彼は容赦ない追求で人の秘密を暴き、それで満足して、あとは臆して踏み込むことを躊躇する。暴かれた人間が、それでどんな痛みを被り、何を期待してしまうのか、考えてみようともしないで……！

「甘く見ていたんだ。学科の方は自分には少々の知識があるって。だから実技の練習に殆どの時間を割いてしまって学科を疎かにした。その結果だよ」

僕は、わざと、考えていたうちでもっともミロの信じそうにない答えを突き出した。僕は、君の判断力を馬鹿にしているんだ。それくらいの事は、いくら君でも分かるだろう？

僕の意地の悪い報復は、たしかにミロに一撃を与えたらしかった。ミロはぎりっと歯をならし、抜き身の刃物を思わせる鋭さで僕の目を睨みつけてきた。

「筆記は前半は楽典で最初の三問は音楽用語、次の二問が記譜法で、その次の一問が音程の概念、次が和音の概念、次が和声二問とその次が対位法だ。ここまでで十問で一体最初の二問以外全部分らなかったなんて、本気でそう言い張るのかよ……?!」

その通りだよ。君は、信じない。そうして、裏切られた事実をずっと胸に刻み付けていればいい。

殆ど絶望しているようなミロの叫びを聞きながら、脳裏に聞こえた自分の勝ち誇ったその声に、僕は唖然とした。

僕は、ミロに嫌われたいのだ。

想ってもらえないのなら、怒りや軽蔑で構わない。

それだって、ただ空回りするばかりの自分の執着を、便利な友人とひとことで片付けられ、挙げ句に用済みとばかりに捨てられてしまうのに比べたら、どんなにか幸せだろう？……。

一瞬、僕は自分のあまりにどうしようもなく低俗な執着に気をとられて、その後の会話が疎かになった。そして気付いたら、ミロに胸倉を捕まれて突き飛ばされていた。

たまたま背後がベッドだったのか、ミロが一応気を遣ってくれたのかは分からない。けれど、結果どこも痛めなかった僕は、再び自分の方に伸びてきた手を思い切り払いのけた。これでも、男ばかり三兄弟の次男だ。掴み合いの喧嘩なら、ミロよりよほど慣れている。

そっちがその気なら、と盛大に反撃を食らわせてやろうとしたとき、リアが背後からミロに襲いかかった。

「放せよっ!!」

「放せるかっ!!　お前こそカミュから手を放せ！」

「リアには関係ない！」

「関係ないことあるかッ！　誰の部屋でこんな馬鹿げたことやってると思ってるッ!!」

「だったら、こいつを引きずって出て行く!!」

「頭冷やせって言ってるんだ!!!」

遂に団子になったもと同室の仲間二人を、僕は呆然とベッドの上に腰をついたまま見つめていた。何故リアが僕を庇ったのかが、全く解らなかったからだ。

新学期始まって初日、一応上級生の部類に入る僕等の学年の喧嘩が騒ぎにならないはずはなく、ハウス・マスターのミスター・ベネットからミロは謹慎を申し渡され、リアも監督生から説教を食らった。

僕が買った喧嘩だったのに、僕は誰からも咎められなかった。

そのことが、まるで僕の存在など彼等には見えないも同じなのではないか、という被害妄想めいた感傷を生んだ。

何を馬鹿なことを。

リアは、僕の代わりに怪我をしたというのに。

リアは、ミロに頬を強かに殴られて、顔に擦過傷を負った上口の端を切っていた。紫色に腫れ始めた唇が痛々しくて、僕は漸く、ごめん、と呟いた。

「お前の所為じゃないだろ。悪いのは、頭に血上らせて手出したあのバカだ」

リアはふうっと大きく息を吐きながら、Shit, と小さく呟いた。

「……怪我はさせないつもりだったんだがな。あいつ、見かけによらず馬鹿力だ」

ミロも、そういえば肩を押さえていた。大切な左腕だというのに、新学期早々に怪我をするなんて、ミロを預かる先生方も想定外だろう。

そう思って、僕はその瞬間までミロの怪我のことなど全く気にしていなかった自分に気付いた。そして、そのことをとても恐ろしく思った。

僕は、心から、ミロにヴァイオリニストになって欲しいと願ったのではなかったのか？

その僕が、本気で、ミロと殴り合いの喧嘩をしようとした？

しかも、ミロも怪我をしたというのに、そのことを気にもとめない……

「……ミロは、羊を抱えて走れるくらいの力があるんだよ……」

リアの呟きに答えた自分の声が、僅かに震えた。リアに気付かれなかったか、と、ひやりと背筋を悪寒が走った。

リアは、僕の声の震えには気付かなかったようだけれど、僕に対して言いたい事はあったらしい。少し目をすがめて僕を見て、ま、座れや、と彼のベッドを指差した。

今度こそ、何を聞いても揺らぐものか。

僕は、そう深く誓って腰を下ろした。

「お前……あいつの喧嘩、買うつもりだっただろ？」

リアは、勉強机の椅子に腰掛けた体を前に倒し、組み合わせた両腕を膝についてそう言った。何処かで見た事のある姿勢だと思ったら、何か大切なことを口にするときの、彼の兄であるアイオロス先輩にそっくりだ。へんなところで兄弟とは似るものだな、と僕は少し可笑しくなった。

「そう思ったから、君は僕等の喧嘩に割って入ったのかい？」

「まあな。ミロの血の気が多いのは今に始まったこっちゃないが、お前が喧嘩を買う時は理由がある。拳でカタつけさせて、大事なことを有耶無耶にしたいときに、お前は喧嘩を買うんだよ」

リアが真面目な話をするときは、一切余計なことは言わない。彼の性格そのまま、直球で切り込んでくる。そこは、彼の兄とは多少異なる。

僕は、ただ黙ってリアの両目を見据えた。

「……あいつが言ってた事、本当か？」

「……何が？」
「転科試験。……白紙回答って話」
　それは、君には関係のないことだ。そう言ってやりたかったが、僕の所為で傷を負ったリアを目前にしてそれは流石に憚られて、僕は、その通りだ、と答えた。
「だけど、ミロにも言ったように、考えた結果だ。さもなければ、僕は間違いなく受かっていた自信があるよ」
「だろうな。ウチの寮の誰も、お前が落ちるなんて欠片も考えてなかったよ。ミロが受かるかどうかは、賭博の対象になってたみたいだがな。お前とポールは合格で決まり。それは誰も疑わなかった」
　それからリアは、少しだけらしくない溜息をついて、もう一度顔を上げた。
「……それは、ミロだって同じだろう。お前は絶対受かるって分かってたから、自分だけ落ちてたまるかってあそこまで頑張ったんだ。その戦友に、何も相談なしに戦線離脱して、しかもそれを黙ってたってのは、ちょっとお前らしくないんじゃないか？」
　リアの目はじっと僕の瞳の奥を見透かすようにこちらを見つめていたけれど、その質問は僕には想定範囲だったから、僕はむしろ微笑して返答することが出来た。「だろうね」と。
「ミロは、間違いなく芸術家だよ。というか、彼があの性格のまま、会社に勤められるとは到底思えない。しかも、ヴァイオリンの腕は突出している――彼には、他にそんなに選べる選択肢はないんだ。
　でも、僕は、そこまで一能に突出しているわけじゃない。会社でもそれなりにうまくやっていける自信はあるしね。専科に行かないという道も最初から考えていた。でも、そんな事、ミロの合格が決まる前に口にしようものなら、彼はまた気を散らせて、とても合格なんて無理だっただろう。Oレベル試験もあったし。
　結局、言わないでいるしかなかったんだ。まあ、ミロが怒るだろうことは予測していた。ミロはフランスまで電話してきたみたいだけれど、長距離電話の喧嘩なんて、先方の親にもうちの親にも容認出来ることじゃないよ。だから、喧嘩は新学期が始まった時までとっておこうと決めたんだ」
　自分でも、上出来だと褒められるくらいに、すらすらと言葉が出た。言いながら、僕は、それが本当の理由だったのだ、と自分で納得した。
　何かの行動につながる理由は、一つじゃない。僕にとっていくつかの納得出来る答えがあれば、そしてそこに秩序がありさえすれば、その全ては理由になり得る。ミロに電話をしなかった一番の理由は、勿論話したくなかったからだけれど、実際問題として、とても十分で済みそうにない喧嘩を旅先の国際電話でやれたかといったら、無理だったのだ。そして、僕は自分が、そういうこともちゃんと計算に入れて動いていることを知っているから、それも真実のひとつだ、と素直に思える。けれどミロは、もっとも強い理由の一つのみを本物と認め、他は欺瞞だ

とはねつけるだろう。

だから、この話は、所詮、どこまで行っても平行線でしかないのだ。

何故電話をしなかったかだけでなく、何故専科に行くことを止めたのか、の理由についても。

リアは、眉間に深い皺を刻んで宙を睨んでいた。僕の話を鵜呑みにしてよいものか、迷っているのだろう。

「納得出来ない？」

「いや……」

逆に僕から問われて焦ったのか、リアは組んでいた手を解き、背筋を伸ばして言った。

「俺はさ、お前のことだからそりゃ慎重に考えて決めたんだろう、ってのは納得出来る。ミロの奴の百倍は考えたんだろうと思ってるよ。正直、こんなのは自分で決めることで、人の決めた進路にいつまでもガタガタ言うんじゃねえ、とも思う。……でも、今迄のお前だったら、あいつが傷付くような事は極力やらなかったよな？

勿論、あいつだってもう音楽で食ってくって決めたんだ。何かとお前に頼るのはやめろ、ってメッセージなら分からなくもないんだが」

リアは、それからちょっと言い淀んで迷った後、結局その続きを吐き出した。

「だが、ミロの合格が判明した時点で、お前の方から連絡することは可能だったはずだろ？　そこが、正直、俺も腑に落ちないんだ。あいつが怒っているのは、お前からその誠意が見えないからで、お前にも当然、それは分かってたと思うんだが……」

アイオリアはそう簡単に折れなかった。折れないという意味で、一番厄介なのはミロだが、リアはこちらの理屈の穴を突いて来るから怖い。

ミロに連絡しなかったのは。

……実のところ、自分でもわからないのだ。

リアの言う通り、さっさと止めたと言ってしまえば、ここまでミロを怒らせる事もなかった。実際、白紙回答を提出し、ウェルナー教授に転科の意思がないことを伝えた時には、本当に心からそれで良かったと思っていたのだ。ミロが僕の願った通り、音楽の道を選んでくれた。専科に行けば、同じ寮と言えど授業は殆ど重ならず、自然と距離が置けるだろう。そうすれば、もうミロに淡い期待をして、勝手に傷つく愚を犯すこともなくなる。僕のした事は、ミロには一生分からないかもしれないが、それでも構わないと、本気で思っていたのだ。

それが、普通科に残る事が決まって一週間が過ぎた時、その清々しかった気持ちが徐々に変質を始めた。ミロとポールが音楽科でそれぞれの専門に没頭する間にも、僕はいままでの繰り返しを歩む――そのことに、息詰まるような閉塞感を感じ、その頸から逃れた彼等に嫉妬めいた感情を抱くようになった。「最後の最後で、裏切ってごめん」と、素直に謝るはずだった筋書きが、日に日に歪みを生じていく。僕は何度も軌道修正を試み

たけれど、結局、最初の筋書きには戻れなかった。

今でも分からない。あのとき、半年かけて考えた道筋は全て辿る事ができるのに、どうしてあの穏やかな心を取り戻す事ができないのか……。

フランスで各地の建築を眺めたいと思ったのは、そうして自分の執着を無理矢理にでも自分が選んだ未来に向けたかったからだった。けれど、それは一時の間僕の視点を別の世界に向ける事には成功しても、意識の深くに澱のように堆積した違和感を払拭することは出来なかった。

ピアノをやめたわけじゃない。音楽は趣味でやれればいいと、今迄ずっと思って来たのに、何故今になってこんなに息苦しい思いをするのかわからない。

ミロに言えなかったのは、多分それが原因なのだろう……ミロが怒るからでも、傷つくからでもない、ただ、笑って「良かったね」と言える自信がないからだ。

「――そうだな。そうすれば良かった。……でも、流石に言いにくかったんだよ」

僕はそう言って、アイオリアの追求に終止符を打った。アイオリアは、あっさりと不手際を認めた僕に拍子抜けしたのか、くそっ、と短くうめいて髪を両手を突っ込み、くしゃくしゃに引っ掻き回した。

「やっぱ、こういうの性に合わねえ。白状すると、ミスター・ベネットに、お前の事頼むって言われたんだわ。去年いろいろあったし転科試験、あんなに頑張ってたのに落ちたから、色々相談に乗ってやってくれって……」

ついでに、不穏な空気がないか見張っていてくれ、と遠回しに言われたのだろう。僕はおかしくなって、あとを続けた。

「そんなの、僕と君が同室だって知った瞬間から分かっていたよ」

学年末に片付けたはずの問題は、こうして新学期に持ち越されてしまったけれど、幸いにして、僕等にはそれに深く関わる余裕はなかった。中等教育が正式に終了した今年から、授業科目は極端に減り、各科目の専門性は一気に高まる。そして、学ぶ事といえば、ひたすら小論文を書くことと、作品を作ることだ。問題を与えられ、それに回答すればある程度の配点がついた今迄と比べると、課題をこなすにしてもとにかく時間がかかる。

そして学年末には最初のAレベル試験がやってくる。サガ先輩のような特殊な例はともかく、普通は下級第六学年の終わりに、Aレベルの準上級試験を受けるのだ。この結果をみて、出願する大学を決める。ここでそこそこの成績を得られなかったら、オックスブリッジやその他の名門大学への道はない。

大体、Aレベル準上級試験（AレベルAS）で成績が良かった科目をAレベル上級試験科目（AレベルA2）に選ぶから、今年は少し余裕をみて皆4科目を選択する。最終的に大学から要求される科目は3科目だけれど、当然、この要求される3科

目を予め選択していなければ話にならないから、まだ希望学部が決まっていない人間はさらに保険をかけて1科目多くとる傾向がある。が、実際のところ、この密度で5科目をこなすのは簡単ではなくて、途中で一科目を切る学生も結構いる。

そんなわけで、Aレベル準備学年最初の関門は、選択科目を選ぶことだった。

僕は、文系に進むつもりはないから、国文系の科目をとる必要はない。けれど、理系だからといって三科目全て理系科目にしてしまうと、選べる学校の幅が極端に狭くなる。また、AレベルA2の科目以外に、AレベルASやOレベルの成績も考慮する学校もある。

そんなわけで、僕は結局、数学、社会学、物理、美術、音楽を選択した。Oレベルから美術を残したのは、照明関係をやるなら現状建築系に行くしかなくて、そこでは大抵美術系のポートフェリオの提出を要求されるからだ（もっとも、デッサンや絵画の技術などは大して要求されない。要は、コンセプトが面白ければいいらしい）。音楽を残すかどうかは随分迷ったけれど、僕が志望範囲に考えているウェールズのカーディフ大学建築学科はAレベルASの芸術系科目の成績を考慮する、とあったから、結局残すことにした。この科目なら、一応まだ理系学科も狙える。

カディフ大、と言ったけれど、ここの建築は国内でも常に上位三位を維持していて、当然、要求されるスコアはオールA。決して簡単な目標じゃない（勿論、私立も入れれば他に有名な学校は沢山あり、建築だけ考えればAAスクールは別格だけれど、ここは専門学校）。建築なら、ロンドンのUC・バートレットも有名で、両親は建築を狙うならロンドンにすれば、と言ったけれど、僕は自宅から通えないところがいい、とはっきり伝えた。家にはまだフィル（弟）がいるから、家を出るならなんとしても奨学金を得なくてはならない。僕をクィーンズベリへ送り出してくれた両親に、これ以上の金銭的負担はかけられないからだ。

そして、社会学を選んだのは、自分でも少し苦笑を誘われるようなものだった。

勿論、芸術以外の人文系科目を一科目入れるべきだ、というのは当然であったし、文系に進むつもりがないのなら、歴史や文学といった専門性の高い科目より、将来自分の専門にも役に立ちそうな科目にすべきだ、という理屈もある。社会学などというのは、文字通り、何処にでも応用がきくだろう。

けれど、そんな計算の中に、もっとずっと個人的な打算がまったく無かったか、と言えば嘘になる。

ミロは、Aレベルでそこそこの大学に入れる成績を得る目標を自分に科した上で、音楽への挑戦を始めた。

ただでさえスタートが遅れているのに加え、学科の勉強もしなくてはならない。当然、学科の方は、出来る限り負担がかからず、しかもハイスコアが望める学科に的を絞ってくるはずだし、教官からもそう指導されているはずだ。

ディスカッション形式が多く、ペアやグループでの作業が個

人の評価に反映される社会学のクラスなら、ミロが選択するかもしれない、と思ったのだ。

ミロに対する感情は、今年六月に自分が気持ちの整理をつけたと思ったほど簡単ではないらしい。初日から、そのことを思い知らされる形になったけれど、それでも彼が音楽で成功することを望む気持ちに偽りはない、と僕は思っている。一般に、専科生とペアを組むのは誰もが躊躇する――調査やまとめの段階で、自分の側にかなり負担がかかってくることを知っているからだ――けれど、僕は、ミロの助けになるのだったら進んでペアを組みたいと思ったし、いくらでも協力するつもりだった。

もっとも、現状ではミロの方が願い下げだと言うかも知れないが。

そんなわけで、人より一科目多く選択した僕には、本当に暇がなかった。ミロが怒っているのは知っていたが、正直、そこに神経を裂く余裕はなかった。ミロは、僕に掴み掛かったことを反省するようミスター・ベネットに言われ、それを拒否して軟禁状態、オーケストラの練習にもまる一週間顔を出さなかったが、僕から謝りに行くようなことでもない、と放っておいた。

一週間後、ミロが漸くハウスマスターの軟禁部屋から開放され、オーケストラに顔を出した。自分の都合で一週間もセカンド・ヴァイオリンのトップの業務を放り出したことをムウ先輩にこってり絞られていたようだが、思いがけずトップ席に座らされて、否応無く弾かされた同学年のセカンド・ヴァイオリンの面々には、本番に向けて結構良い刺激になったのじゃないか、と僕は思っている。ムウ先輩もそう思っているに違いないが、それをおくびにも出さないのはなかなか意地が悪い。

その日の練習後、僕はミロに呼び止められ、不本意、と顔に墨書きしたような表情で、僕に対して手を上げた事を謝られた。僕は可笑しくなって、「うちは男三人兄弟だし、取っ組み合いの喧嘩なんて珍しいことじゃない」と返した。

「でも、カミュが黙って、嘘をついた事には、まだ怒ってる」

そのあと聞こえたミロの声は、その内容を裏切る静かさで、そして少し悲しそうだった。僕は、ああ、ミロは怒っただけでなく、本当に傷付いたのだな、と思った。

そして、そのことに安堵した自分を感じた。

とても、傷付いたのだろう。信じていた人間に、酷い裏切りを受けて。それはそのまま、僕の存在がミロの中で、それだけ大切なものだったのだという証にほかならない。

過去の自分ではあるけれど、それだけ大切に思って貰っていたことは嬉しかった。そして、僕は、ミロをこんな形で傷つける事でしか、その確証を得ることが出来なかったのだ。

もう、いいだろう。

これ以上、ミロが傷付く理由も、必要もない。

僕は、先に述べた理由をもう一度繰り返して、この話を終わりにした。そして、明日からは、ミロとは普通の友達として付き合おう、と決めた。

ミロはまだ、僕と僕が放棄したものに未練があるかも知れないが、数ヶ月もすれば僕等の差は歴然と見えて来る。僕の時間は止まり、ミロの時間は進み続ける。ミロがそのことに気付き、僕への興味を失うのも、そう遠くない未来だと分かっていたからだ。

普通科生が科目の選択を終えてから二週間も過ぎた頃、僕はミロがAレベルAS科目として音楽、物理、数学、社会学の四科目を選択したことを知った。音楽は特にそのために勉強することなど何もないから、実質三科目だ。しかし、それでも他の殆どの専科生よりは一科目多い。おそらく、実験で時間をとられる物理は学年の途中で切ることになるだろう、と僕は思った。

僕は自分の選択科目など教えていないから、これは偶然か、あるいは指導教官のミス・エヴァンズの注文だろう。ミロは数学は最初から成績がよかった。そして、社会学を選ばせたのは僕が考えたような理由そのものだろう。

やがて、その多忙なスケジュールに交響楽団の練習が食い込んできて、僕等は個人的な話など一切出来ないような忙しさの渦に叩き込まれた。僕も忙しかったが、ミロやポールの忙しさは本当に眠る時間はあるのかと思われるほどで、専科生がAレベルで高得点を狙うことの難しさを浮き彫りにした。

そして、遂に、ミロが授業を欠席し始めた。

「ミロ、最近、二回連続して数学の授業に出れなかったみたいだけど、ノート、誰かに借りれてる?」

十月も二週間を過ぎた頃、僕は、たまたま廊下で出会ったミロにそう声をかけた。十月から数学は連続の概念や極限値といった大切なトピックスに差し掛かっていて、ここを理解していないとその先の学習に差し障りが出ると思ったからだ。

ミロの時間が許すようなら、ノートを見せながら何を重点的に学んだかを教えてもいいと思っていたけれど、すぐにそんな暇はないだろう、と思い直した。一応ノートには、昨日復習しながら大切だと思われる箇所にはマーキングをしてある。

ミロは、僕からこんな申し出を受けたことに驚いたようだった。ミロの中では、まだ僕等が気まずい関係にあるという認識らしい。

「あ、うん。ありがとう……」

ミロは、呆然、といった表情から抜け出せないまま、そう返答した。

「じゃあ、すぐに取って来る。ちょっと待ってて」

部屋に向かいながら、僕は、いつもより少し軽い自分の足取りを自覚した。もうミロを特別視するのは止めようと決めたのに、我ながら矛盾している。つまりは、ほんの少しでも、まだミロの役に立てる事があるのが嬉しかったのだ。

ミロにノートを手渡して、上機嫌で部屋に戻ると、部屋の前には何故かウォルトとマックスが立っていた。

「あ、カミュ、よかった、戻って来たのか」

マックスがそう声を上げ、ウォルトは腕時計を見た。

「よし、じゃ行こう。時間だ」
「え？　一体なんの話だ？」
僕は彼等が僕を待っていた理由がわからず、そう聞き返した。
「呼び出しだよ。最上級生の。この時期だからな。まあ、もう何の話題か想像はつくけど……」
「っていうか、そういう伝言はもっと早くに言えよ」
ウォルトがマックスを肘でつついたところを見ると、ウォルトも又迄知らなかったことなのだろう。
「行き先は？」
「ローズ寮。コン・マス部屋だよ」
それで、僕にも話の内容の見当はついた。

ローズ寮の最上級生部屋に入るのは、思えばドウコ先輩やシオン先輩がここに居た頃、僕がクィーンズベリに入学した年以来だ。ハウス・カラーの臙脂色の絨毯の敷き詰められた階段を上がり、最上階に辿り着くと、チューバ奏者で団長のジャック・ホワイトウッド先輩が部屋から顔を出して出迎えてくれた。
「さて、もう呼び出しの理由は分かっていると思うが……」
部屋に入ると、僕等の他に、ロウ寮からコントラバスのマーチン・スクージー、ウェルダン寮からフルートのジョナサン・ブリッジとヴァイオリンのハリー・メイフォードが参加している。集合場所がパーク寮のホワイトウッド先輩の部屋にならなかったのは、この部屋が監督生部屋ですっと広いからだろう。
「お前達は、次代の団長及び副団長、学生指揮者、管セクション・リーダーとして推薦されている。弦の方のセクションリーダーはミロ・フェアファックスで決まりだから、残りを誰がやるか相談の上決めて欲しい。勿論、ここに居ない人間にも権利はあるが、推薦は伝統的に最上学年が実力と、学科の成績を考慮して行うことになっている――勿論、顧問のブラウン教授の意見も考慮済みだ」
「まあ、実はマックスはちょっと成績が足りないがな」
トランペットで現在の管セクション・リーダーのダン・ウォルトン先輩が笑いながらマックスの頭をつついた。
「え、俺、Oレベルではそこそこ挽回しましたよ！」
ダン先輩とマックスは実は家が近く、プライマリの頃はよく一緒に遊んだ仲だったらしい。それで、こんな遠慮のない会話も出来るのだろう。
「まあ、そういうわけで、この部屋をあなた方に提供します。我々は議論には一切口を出しませんが、質問があったら答えます。我々は居ないものと思って話して構いませんよ」
ムウ先輩がそう締めくくり、「では、茶でもいれましょうか」と席を立った。
僕等六人は、ムウ先輩の応接室のテーブルを囲んで、それぞれに腰を下ろした。
「この中だったら、まずは学生指揮者から決めるべきかな？　学指揮は技術職だから、スコアリーディングが早い奴じゃないと大変だし」

まずヴァイオリンのハリーがそう口火を切り、皆一様に頷いた。そして、そのまま、全員の視線が僕に集中した。
「えっ……ちょっと待ってくれ、僕はそんな大役出来ないよ」
僕が慌ててそう言うと、マーチンがすぐに「でも」と反論した。
「はっきり言って、この中で一番音楽の素養があるのはカミュだろ？　譜読みも早いし、知識だったら多分専科のミロより上じゃないか？」
「それは間違いないな」
ジョナサンが苦笑し、でも、それだったら多分ここにいる全員あいつより上だろう、と付け加えた。
「でも……学生指揮者は……」
どうしても、コン・マスとの関わりが深くなる。僕は、咄嗟にそれだけは避けなければならない、と思った。ミロと、普通に友人として付き合うことは出来る。でも、音楽の話を何事もなかったように出来る自信はない。
「もっとも、カミュが学指者になっちまうと、団長候補が難しくなるけどな」
「あ、それ言える」
ジョナサンとハリーがそう言って笑った。二人はすっかり僕を何かしらの役職につけるつもりでいるらしい。僕としては、団の信任を受けられるなら無理に固辞するつもりはないけれど、団長もまたコン・マスとそれなり密に連絡をとらなければならない立場なので、一瞬返事が遅れた。と、そのとき、不意にマックスが会話に割って入った
「あの、さ……学指揮って、俺、やっちゃ駄目かな？」
文字通り、その場の空気が固まった。
実は、マックスは初心者でオーケストラに入って来て、それまでまともに音楽をやったことはなかった。けれど、トロンボーンに対する情熱は本物で、学校の授業以外に個人レッスンをつけたお陰もあって、この三年間で確かに実力をつけた。
しかし、学生指揮者というのは、ただ楽器が吹けるというだけではつとまらない。全パートの動きを把握し、どうすれば音楽がまとまるのか、的確な指示を出さなくてはならないからだ。勿論、そのためにはスコアも読んで研究しなければならないし、指揮棒だってただ振ればよいというものじゃない。
要するに、コンサート・マスターを除けば、団の主要な役職のうちもっとも　色々な意味で時間を割かれる役職なのだ。
僕はこのとき初めて、ダン先輩のコメントの意味を理解した。
つまり、マックスは自分を推薦してもらうよう、ダン先輩に頼んだのだ。
「そりゃ、やりたい奴がやるのが一番いいが……お前、本当に大丈夫か？」
ウォルトが、心配げな表情を隠さずに聞いた。マックスの成績は中の上くらいで、大学も選ばなければ行けるところはいくらでもあるが、所謂名門大学を狙おうと思うとかなり成績が足りない。けれど、マックスは、落ち着いた笑顔で「大丈夫だ」と言った。
「俺、アメリカの大学に行くつもりだから。Aレベルは勿論受

けるけど、あんまり関係ないんだ」
「えっ……マジ？　もう決めたのか？」
　マーチンが食いついて、皆そのあとに続いた。
「なんで？　イギリスにもいい大学いっぱいあるだろ？」
「うん。でも、向こうでやりたい事あるし。うちの親もそれならそれでいいって言ってくれたからさ」
「まじかよ……やっぱ金持ちは違うなあ」
　マックスの家は、お父さんが園芸用品会社の社長で、かなりの資産家だ。僕もクィーンズベリに入ってすぐの頃、家で母が使っていたガーデニングキットの名前が、マックスのお父さんの会社のものだと知ってびっくりした。その後、オーケストラで殆ど毎学期楽器を買い替えていたマックスに、当初は多少羨望と妬みの視線が向けられていたが、当の本人のおおらかな人格が幸いして、今では誰も揶揄の色なくマックスのボンボンぶりを認めている。
「俺、ちゃんとスコア全部読んで、勉強するからさ。もし他にやりたい奴がいないんなら、やってみたいんだけど」
　熱意ある眼差しでそうマックスに説得され、僕等は全員が喜んで彼に学指揮を任せることにした。最終的な決定には団員の信任を得なければならないけれど、結局本気でやりたい人間がやるのが一番良いと皆納得するだろう。
「次は団長だけど……これは、この面子見たらもう決まったも同然だよな」
　ハリーがそう言って僕を見た。
「何しろ、カミュが将来の団長候補ってのは、三年のときの演奏会打ち上げの席でもう決まってたもんな」
「いや、あれはそれこそ、お酒の席の話で……」
「だからだろ？　代々、団長と管セクションリーダーは酒豪でないと勤まらないって不文律があるんだからさ」
　このイギリスで、家庭やバー、レストラン以外の場所で合法的に飲酒が許可になるのは十八才以上だけれど、僕等交響楽団のメンバーはそれよりかなり早くにアルコールの味を知ることになる。演奏会後の打ち上げの席で回ってくるからだ。しかし、そのためには、顧問のブラウン教授を先に潰さなければならない。というわけで、ブラウン教授と席を同じくする団長、セクションリーダーは、教授が潰れるほど飲むのに付き合っても正気を保っていられるだけのアルコール耐性がなくてはならない、というわけだ。
「いや、そういうもので決めるべきじゃないと思うんだが……」
　僕が一応まともと思われる基準でそう言うと、隣からウォルトが苦笑しつつ口を挟んできた。
「まあな。でも、俺も、この中で誰か一人、といったらお前を推薦するかな」
　僕はちょっと意外な気がしてウォルトを見詰め返した。
　ウォルトと僕は、何かと比較されることが多い。実際、成績も殆ど並んでいるし、彼が密かに僕に対してライバル意識を抱いている事も知っている。僕も、普通科で一番の好敵手は、と聞かれたら、迷わずウォルトだと答えるだろう。

そんなウォルトがどうやら本気で僕に道を譲るつもりらしいので、驚いたのだ。

「そうかな？　僕は、君がいいと思ったんだけどね」

僕がそう返答すると、ウォルトは首を竦めて見せた。

「冗談。俺にあのコン・マスは制御できんよ。団長は、団の要、団員全員からの人望がないと駄目だ。特に、団の要職にある連中の手綱をとれる奴じゃないと……その点、あのミロを黙らせられるのは、うちの学年ではお前くらいだろう」

「そうだよ！　ミロはもう専科生だし、俺等の話なんて聞かないかもしれないからな！　でも、昔散々世話になった、っていうか、迷惑かけたカミュの言う事なら聞くかもしれないだろ？」

「それは……どうかな」

僕は、謙遜ではなくかなり本気で不安を感じてそう返答したけれど、その場の誰もそうは受け取らなかったようだった。

結局、それから三十分ほど続いた話し合いで僕が団長に立候補することになり、副団長にハリー・メイフォード、管セクションリーダーにウォルト・パーシー、そして学生指揮者にマックス・グルーバーがそれぞれ団員の信任を問うことになった。

一週間後、十二月の定期演奏会のメインの曲、シェラザードの合奏の前に、僕等は団員総会で無事団員の信任を受けた。ムウ先輩はミロを自分の横に座らせて「貴方にはまだまだ学んでもらうことがあります」と釘を刺していたけれど、ミロが交響楽団の歴史に名を残すコンサート・マスターになるであろう事を疑う者は誰一人として居なかっただろう。

マックスの学指揮就任は、一部の上級生から意外な人選との反応があったけれど、来年の本番に向けて全力で努力する、との本人の言葉に予想通り全員から暖かい拍手で迎えられた。

そして、僕とハリー、ウォルトの三人は、ほぼ予想通りと受け止められた。現団長のホワイトウッド先輩はからは、「団員を働かせてこその団長だ」と有難い訓示を貰い、何でも自分でやろうとするなと忠告されたけれど、内心僕はそれが杞憂であることを知っていた。

六年生になって、僕は音楽に対する自分の姿勢を改めた。交響楽団で重大な役職を得て気を引き締めはしたけれど、それはこれまでのように、ともすれば多少学業を犠牲にしてものめり込むようなものではなくなっていたのだ。

団員総会のあと、五年生のクラリネット奏者マイク・プリンストンから、去年ミロが始めた新人生強化合宿をまた今年も行うとアナウンスがあった。去年の新入生に好評だったため、今年から五年生と四年生が共同で企画するとのことだった。

それからほどなくして、上級生に夜のアンサンブル大会への出演要請が回ってきた。僕の直属の後輩、パーカッションのフランツはピアノを使うデュオの半分近くを引き受けていて、まるで昔の自分を見ているような心持ちにさせられた。ジョシュアは勿論、ヴァイオリンだけでなくピアノでもソロを引き受けていて、この一年の彼のめざましい成長を見せつけた。

そして、そのジョシュアから、僕は再び連弾の誘いを受けた。

「ピアノ科の連中は、先輩が転科を取りやめてくれてほっとしてるよ」

残念ながら学業が忙しいので、今回は辞退する――そう伝えたロバートホールの練習室で、ジョシュアは「そう」と二言すこしがっかりしたように零した。もしかしたら、彼の用件はそのことではなかったのかも知れない。話が済んだ後もすぐに帰ろうとはせず、練習室のプレハブのドアに凭れ掛かりながら、そう切り出した。

「ミロもだけど、普通科出身の先輩に首席を持って行かれちゃ堪らない、ってさ。全く下らないよ。今ライバルが一人減ったところで、世界にはそれ以上のライバルが五万といるんだ。ここで普通科の先輩に叶わないようじゃ、どのみち世界でモノになんかならない」

「それは、僕もそう思うが……ピアノ科の学生がそれで安堵することはないのじゃないか？　テクニックの面では彼等の方がずっと進んでいるわけだし」

「そんな差、すぐに縮まるよ。僕等は朝から晩までピアノを弾いてこのレベル、でも普通科は一日の殆どを音楽室の外で過ごしてるんだから」

ジョシュアは少しつまらなそうにそう言って、それから、僕の視線を避けるように俯いた。

「……先輩、あのシャコンヌは、ミロに聴かせるための選曲？」

この質問には、一瞬声が詰まった。そんな事に気付いていたのは、ポールくらいだろうと思っていたからだ。

「……どうして、そう思う？」

「そりゃ、結果を見れば簡単に想像がつくよ。あの日の前のミロのシャコンヌ、練習室から聞こえてたけど、あんなのはっきりいってクズだ。あのままだったら、ミロは間違いなく受からなかったよ。それが、先輩のブゾーニを聴いて、たった二日で化けた」

「……偶然だろう」

「そうかも知れない。でも、最初から、ミロは構成が甘かった。良く弾けるけど、頭使ってないんだよ。他の曲は天性の勘で誤摩化せても、バッハはそれじゃ駄目だ。……先輩が一番良く知ってたんじゃない？　一年もデュオ組んでたんだから」

ジョシュアの眼差しはいつの間にか僕を真っ直ぐに見ていて、僕は狼狽した。この、僅か十代前半で音楽に一生を捧げることを決めた少年の目は誤摩化せないと、唐突に思い知らされたからだ。

「……あのブゾーニは」

ジョシュアは、そこで言葉を飲み、それから言葉を慎重に選びつつ続けた。

「……ちょっと、出来過ぎだった。もし学科が満点でも、教官連中は編構難しい判断を迫られたかも知れない。完成されすぎて伸びしろが見えないってね。そんな噂も聞いた。僕も正直、これでウチ程度の専科に来て何を勉強するんだ、と思ったしね。

でも、どっちにしても僕は受けて立つつもりだったんだけどね」

喉元に、研ぎ澄まされた剣を突きつけられたように感じた。それほど、妥協を許さない強い瞳がこちらを見ていた。

「……でも、もう済んだことだ。先輩は、自分でその可能性を捨てて、別の道を選んだ。……今ならまだ引き返しても間に合うと思ったけど……もうそんなに勉強の方に集中してるんだったら、多分、そっちの方がいいんだろう?……だけど、それなら、ミロのヴァイオリンは、僕が貰うよ」

たかだか十四歳の少年とは思えない、強い言葉の裏で、僕はジョシュアが僕のピアノを惜しんでくれているのを感じた。勿論おそらくは、音楽とは掛け離れた理由でそれを捨ててしまったことへの軽蔑の方がより勝るだろうけれど。

ミロがあの僕のシャコンヌをどう受け取ったのか、僕は知らない。試験二日前に構成を全く変えてしまうほどには影響を与える事ができたのだろうけれど、具体的に彼が僕のピアノをどう思ったかは、お互いに音楽の話を避けていたこともあって聞かなかった。

ミロは、本当に失いたくものの為には手段を選ばない。今に至って、彼の関心が僕のピアノが失われる事そのものではなく、僕の裏切りに向いているという事実が、結局ミロの中での僕のピアノの価値を示しているのだろう?……。

少しふてくされたようなジョシュアの表情を見ながら、僕は彼が僕に伝えてくれた心に感謝した。

あの時、僕の全てをかけたバッハは、多分客観的に見て、それなりの高みには到達出来たのだ。

それは、たとえ望む相手からの賛辞でなかったとしても、甘く嬉しいものだった。

「……うん。ミロは最初から君のピアノを気に入っていたから、いいペアになるよ。……有り難う。あのシャコンヌをそんなに評価してくれて」

月日は飛ぶように過ぎて、いつの間にかこのどこか現実から浮遊したような秋学期も終わりに近づいていた。ムウ先輩とジャック・ホワイトウッド先輩が率いた第一二六代管弦楽団は、近年珍しいほどに何事も問題なく本番の準備を進め、そのお陰もあって僕自身はかつてないほど学業の方に集中することが出来た。去年ピアノに割いた時間分の遅れも無事取り戻したし、試験の準備も順調だった。

学期末試験の後、僕は総合成績でウォルトに十五点差をつけて首席になったことを、ハウスマスターのミスター・ベネットから聞かされた。

「よく頑張ったね。……というより、これが君の本来の実力だったのかな」

ミスター・ベネットの微笑みには、少し申し訳なさそうな色が混じっていた。おそらく、ベネット氏は僕にミロの監視役を任せてしまったと負い目を感じているのだろう。実際は、僕等

はお互いに助け合って来たし、決してベネット氏が危惧するような一方的な関係ではなかったのだけれど。

「……というのは、ウォルトの受け売りだけれどね」

「……ウォルトが？」

「去年の今頃かな。ウォルトが学年首席をとったときに、そう言っていたよ。自分は、なるべく面倒な役職を引き受けないようにして漸く首席を守ったけれど、君はオーケストラや課外活動で率先して役職を引き受けて、仲間からの相談にも積極的に乗って、それでも自分と殆ど成績が変わらない。ひとたび君が本気になったら、自分は敵わない、とね」

僕は、一年も前にウォルトが残していた本音に胸がつまる思いがした。そういえば、ウォルトがミロとジョシュアの事で口論したのも去年の秋のことだ。それは、それほど苦労せずとも学業もヴァイオリンも好成績を収めてしまうミロへの反感だったけれど、同じようにオーケストラにかまけていた僕にもきっと思うところがあったのだろう。

「ウォルトは今年オーケストラでファゴットのパートリーダーを引き受けていますし、この秋色々と忙しかったようですから。同じ言葉を僕もウォルトに返しますよ。学年末も頑張らないと、簡単にひっくり返されそうです」

本音を言うと、僕はそんなに学年首席をとることに興味はない。オックスブリッジに行きたいわけではないし、試験で良い成績がとれるというのと、本当に頭が良いというのは全く別のことだからだ。

けれど、順位にあまり興味のない様子を見せるのも時と場合によっては良くないと、僕は昔合唱団に所属していた時代に学んでいた。

大人達も、そして僕等ぐらいの年になれば仲間達も、ステロタイプには安心する。

それならば、余計な波風を避けるためには、ある程度ステロタイプを演じる事も必要だと、僕は経験から知っている。

けれど、世の中にはそういう小細工が出来ない人間がいる。そのうちの殆どは、そういう「振り」を毛嫌いしていてわざとやらないだけだが、たまに、そういう駆け引きそのものがまったく出来ない人間がいる。

痛い思いなら、十分しただろう――それでも、それを避けるために皮を被る事が出来ず、ステロタイプを望む者たちが生む嵐の中で翻弄され、傷付く。

愚かだと笑うことは出来るが、彼等の前に在る時、一切自分を偽る必要がないことにほっとする自分がいて、そのいとおしき愚かさから目が離せない……。

それが理由でミロを思い切れないとしたら、それは最早好意ではなく、身勝手な執着に過ぎないだろう。

断ち切るのは、多分、そんなに難しいことじゃない。単に、ミロの前でもステロタイプを演じ続ければ良いだけのことだ。

今度ウォルトと話すことがあったら、「勝負はまだついていない」と伝えて欲しい、と言いおいて、僕はハウスマスターの部屋を出た。

交響楽団の本番は、去年のサガ先輩のチャイコフスキーほどの華はなかったものの、シェラザードをメインにしたロマンチックなプログラムで好評を博した。ムウ先輩は普段は理性的なヴァイオリンを弾く人だが、シェラザードのソロはとても甘く切ない音で、静かなポーカーフェイスの内側に潜めた先輩の一面を垣間見る事が出来た。

アンサンブルも、今年はよくまとまっていたと思う。団長のジャック・ホワイトウッド先輩を始めとする執行部の結束が固く、最後まで団員に脇目を振らせない牽引力があった。音程の甘さを指摘されがちなセカンド・ヴァイオリンは、ミロがトップになり厳しく後輩を指導したため、例年にない水準で本番を迎えることができた。

打ち上げの席で、今年の最上級生は本当によく頑張った、と上機嫌でコメントするブラウン教授を見ながら、僕は本当にその通りだな、と思った。

宝石箱のように光るプレイヤーで溢れた、サガ先輩を始めとする第一一五代オーケストラの魅力は、勿論何年経っても色褪せるものではないだろう。けれど、一部のプレイヤーの技術力に頼らずとも、人の心を打つ音楽はやれる。僕が率いる第一一七代オーケストラも、そうあらねばならない、と思ったのだ。

そのためには、未だにぎくしゃくとしているミロとの関係を何とかしなくてはならないのだけれど……。

急ごしらえの舞台の上で、顔を真っ赤にしながらトランペット・ヴォランタリーを吹いているダン・ウォルター先輩を見ながら、僕はどうやってミロと以前の関係を取り戻そうかと考えていた。

以前と同じように――言うほど簡単ではないことは、よく分かっている。ミロもまだ僕を許してはいないだろうし、僕自身が、まだ正直なところミロとは距離を置きたい気分だからだ。

でも、そんな私情がどれほど周囲に悪影響を及ぼすか、僕等は十分すぎるほどに知っていた。僕は今もサガ先輩とアイオロス先輩を尊敬しているが、彼等が犯してしまった過ちを繰り返す事だけは断じてしてはならない。そう、団長を引き受けると決めた時に決意したのだ。

ミロは、この冬もイタリアにレッスンを受けに行くと、セカンドヴァイオリンの下級生が話しているのを聞いた。この余興演奏会が終わったら、飲み物でも持ってミロにこの冬の予定でも聞きに行こう。

そう心に決めて、自分のグラスにワインを注ぎ、ミロのためにオレンジ・ジュースの入ったグラスに手を伸ばした時だった。

視界の端で、二つの金色の影が動くのが見えた。それが誰の影であったのか、その時僕はまだ気付いていなかったけれど、何故かそこだけがくっきりと光が差したように浮かび上がり、時間が急にゆっくりと進んだ。

その違和感に振り返った瞬間に、それがミロとジョシュアである事に気づいて、息が止まった。

ジョシュアの片手には、分厚い楽譜が握られている。何度もミロを振り返って急かすその仕草と、まんざらでもなさそうな様子でその後をついていくミロの姿に、人影に隠れて見えないミロの左手に握られているものを察した。

ジョシュアとミロのデュオ……！

一年前、偶然に聞いてしまったロバート・ホールでの二人の「雨の歌」がフラッシュバックし、胸が押し潰されたように感じた。

今ここで、専科生二人のデュエットを披露するつもりなのか……

団員の喝采が遠くに聞こえる。先刻までアルコールで火照っていたはずなのに、はっきりと体温が下がったのを感じた。

何も動揺するようなことではないと、自分のものではないような声が頭の中で繰り返す。団員達も喜んでいる。あの二人のデュオなら誰だって聴きたいだろう……必死でそう自分に暗示をかける。

その声の向こうで、言葉にならない感情が軋んだ。

何故、あそこに居るのが自分ではないのか……。

手に持ったグラスを、テーブルに置いた。そのまま握っていたら、壊してしまうかもしれない、と危惧したからだ。

彼等の音を聴いたら駄目だ。昔の関係に戻るどころではなくなる。

僕は、やっと僕が直前まで考えていたプランを思い出した。欺瞞でもなんでもいい、ミロとはよりを戻さなくてはならない。

とにかく、今すぐに此処を出なければならないと、恐怖に近い焦りに突き動かされて壁際に寄った。後ろのドアからそっと出れば、きっと誰も気付かないだろう。

けれど、僕のその目論みは、成功の一歩手前で阻まれた。

「あ、カミュ、そっちの方がよく見える？」

ワインで頬を赤くしたアンソニーが後をついてきて、僕の肩を引いたのだ。

トイレに行くとでも言って振り切れば良かったのかもしれない。けれど、僕がこの場から逃げようとしていたなどとは露程も疑っていない笑顔に、僕はそれを躊躇した。

そして、その瞬間、ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ第9番「クロイツェル」の最初のクオドール・ストップが、静寂を切り裂いて鳴り響いた。

それからの十分間を、どうやって凌いだのか、自分でも分からない。

アンソニーの手を振り切って逃げることも出来た筈だし、止めろ、と滅茶苦茶に喚いて演奏を台無しにしてもおかしくはなかった。

多分、ただ単に、ミロの音楽が、僕にそれをさせるだけの自由を与えなかった、ということなのだろう。

専科に進んでからほんの三ヶ月しか過ぎていないというのに、それは最早、僕の知っているミロの音ではなかった。

あまりに遠くへ行ってしまった友人と、その遠くで彼と対等

に楽器を奏でる事が出来る相手と――

僕は、このとき初めて、僕の選択が僕から永遠に奪ってしまったものを、身を切られるような辛さと共に直視した。

あんな風に、一緒に楽器を奏でてみたかった。

遠慮と打算で塗り固められた、生温い言葉なんて要らない。楽器を通して、むき出しの相手の姿が見える――その姿のまま、本気で語りかけて欲しかった。

僕はミロの為になると思えることなら何でもしてきた。その「報酬」としてミロの親友の位置に在りながら、それでも心の奥ではずっと、そんな打算に関係のないところでミロに認めて欲しいと願い続けてきたのだ。

そもそもそれが無理な願いだったのか、それとも、単に、僕の音楽が未熟でミロには届かなかっただけなのか……

今となっては、わからない。

かつての僕はミロの本気に値しなかった。けれど、音楽を捨ててしまったことで、僕は未来にもしかしたら実現したかもしれない可能性も切り捨ててしまったのだ。

ただ、ミロに嫌われたくなくて、音楽を手放した筈だったのに。

今は、音楽をなくして、どうやって友人の振りを続けていけばよいのかが分からない……。

最後の音の余韻が消えると同時に、僕はアンソニーに断ってホールから抜け出した。

同室のアイオリアに風邪をひいたと偽ってベッドに潜り込んだ瞬間、堪えていた涙が溢れた。

元通りになど、なれるはずがなかったのだ。

ミロはもう、昔のミロではない。専科で期待され、理解者もいる。

彼を学園生活に馴染ませようとした僕の役目は終わり、これから僕等の道はまったく別の方向へ別れていく。

ならば、彼はどうしてまだ形だけの友人関係に拘ろうとするのだろう？

僕は、全てを手にいれておきながら、まだ僕との温い関係を維持しようとするミロに憎しみを覚えた。

本気で相手は出来ないが、昔の恩義から友達であらねばならないと思っているのか。

それとも、学科でまだ利用価値があるかも知れないから、まだ手放したくないだけなのか？

僕は、ミロとの関係で傷付き、大切なものを失うばかりだったというのに……。

翌朝、僕はドアの間に挟まった小さな紙片を見つけた。

イタリアに発つ前に走り書きしていったと思われるミロの筆跡に、僕は三秒だけ視線を止めて、小さく粉々になるまで引き

裂いて屑篭に捨てた。

一月。

生憎の雨で始まった新学期は、例年になく騒がしい空気で満ちていた。

ミロがアルバイトでやったモデルの仕事が写真集になり、クリスマスにロンドンの店頭に並んだのだ。

ヘンリー・アジェというのは、これまではどちらかといえば風景写真で知られた写真家だったけれど、このクリスマスに合わせて少年、少女を対象としたポートレイト集を出版した。

その中に、ミロの写真があり、表紙に使われたのも彼の写真だったのだ。

「これ、有り得ねえだろ！　アイツがこんなマジな顔してるところなんか、見た事あるか?!」

ハウが母親に頼んでクリスマスプレゼントとして買ってもらったという本を抱えて走り寄って来た時、僕はその写真のあまりの「ミロらしさ」に苦笑した。有り得ない、どころではない。これは彼そのものであり、アジェという一人の写真家が見抜いたミロの本質だ。おそらく、ミロのヴァイオリンを絵にしたら、こんな感じになるだろうな、と僕は思った。

「え、お前、ロンドンに戻ってたんだろ？　この写真集のこと知らなかったのか?」

真面目に全ページ見て礼を述べて返した僕に、ハウが意外だというようにそうコメントした。

「ああ、本屋に並んでるのは見たよ。でも、高かったし、そのうち図書館に入るだろうと思ったから」

「へえ……俺は、お前なら絶対自分の小遣いで買ってると思ったけど……」

「まさか！　こんな重くて分厚い本、持ってたって邪魔になるだけじゃないか」

僕は、ハウに写真集を返して、オーケストラの練習のため八角堂へと向かった。小降りになった雨が、ぽつぽつと頬を叩いて僕の神経を苛立たせた。

確かに、二年前の僕だったら、間違いなく自分で買っていただろう。けれど、クリスマス前にロンドンでこの写真集を見た時、僕の中に沸き起こったのはあの演奏会の夜の鬱屈だった。

こういうのを、嫉妬というのだろうな、と冷めた自分が言う。ヴァイオリンが弾けて、有名な写真家の写真集の表紙を飾れるほど外見にも恵まれている。この赤毛のせいで、からかいというにはたちの悪すぎる苛めも経験して育った僕とは大違いだと。

ますます、「元通り」の友人に戻る必要性を感じなくなった。ミロはもう、違う世界の人間なのだ。

八角堂についてみると、ここもまたミロの写真集の話でもちきりで、僕はそのことに少しうんざりした。

合奏の日は、指揮者が来る三十分前に集合。下級生は椅子や譜面台を用意し、上級生はその間に音出しをしておく決まりになっている。六年生のみ、合奏十分前までに来れば良いことになっている。

が、誰一人として、準備を進めている者はいなかった。

「何時まで冬休み気分でいるんだ？　練習時間はとっくに始まっている。下級生、椅子の準備が出来ていないじゃないか。上級生も、楽器をケースから出さずに何をしているんだ？」

言ってしまってから、団長としての第一声がお小言とはいただけない、と多少自己嫌悪した。

バタバタと下級生が椅子を運び始める中で、ミロと一瞬視線が合った。イタリアでの特別レッスンはそれなりに充実したものであったらしい。休みに入る前よりも落ち着いた自信のようなものが、彼をとりまく空気に溢れていた。

その、何か言いた気な眼差しに、冬中考えていたことを今日実行に移そう、と決めた。

オーケストラの中では同じ熱管部の仲間であり、協力が必要なところでは力を惜しまないが、馴れ合いは御免だ。そのことを、どうミロに伝えるか。

僕は、練習後にミロを呼び出し、もう一ヶ月以上も前に気付いていたことを問い質した。

授業を欠席することが多くなったミロには、実は個人授業のチューターがついている。僕がミロのために貸し続けていたノートは、全く無意味だったわけだ。

ミロに何時からチューターがついたのかは知らない。けれど、そのことを黙って僕からノートを借り続けていたミロに、僕はミロの僕に対する未練を感じた。

僕の感心を引きたいのなら、どんな手を使ってもそうすればいい。僕がミロの気を引くために何でもやったように。

自分は何一つ傷みを被ることなく、持っているものを手放そうともせず、関心だけを得たいなどというのは、あまりに都合が良すぎる望みというものだ。

案の定、僕の追求にミロはあっさりと手にしていた権利を手放した。その程度で諦められるものなら、最初から望むな、と言ってしまえれば簡単なことだが、一応形だけでも団長とコン・マスが不仲ではあってはならないという制限でなんとか口にするのは思いとどまった。

あとは、折りにふれて、ミロがそういう余計な期待を抱かないように釘を差していけば、きっとそのうち必要最低限以上の関わりを持ちたいとも思わなくなるだろう。

つくづく、今年度ミロと同室にされなくて良かったと思いつつ最初の一週間が過ぎたころ、ある意味最初から予想されていた事が現実になった。

社会学のアカデミック・ライティングの授業で、ペアを組んでレポートを提出する課題が出されたのだ。二人一組でテーマを決め、論文や資料を読み、議論した結果を論文にまとめる、

というものだ。

課題が出た授業の直後から、誰もがペアを探して声をかけていたが、専科生のミロは誰からも声をかけてもらえずに立ち往生していた。

既に新学期始まった頃のような穏やかな気持ちではなくなっていた僕は、当初から考えていた計画を実行するか否か、暫くの間迷った。正直なところ、今はあまりミロと関わりたくなかったからだ。

誰かが、そのうち声をかけるだろうか？

僕は暫く黙って様子を伺っていたけれど、誰一人として、ミロの側へ寄ろうとする者はなかった。

……まあ、専科生相手に、すすんでペアを組もうというお人好しはいないか……。

思わず、溜息が口をついた。ミロもミロだ。自分から声をかけなければ、相手などつかまらないだろうに。

「あ、カミュ、一緒にやらないか？」

と、その時、あまり知らない顔の学生から声をかけられて、思わず背筋が伸びた。

はっきりと名前を呼ばれたけれど、僕の方は彼の名前を知らない。

この目立つ赤毛のお陰で、他の寮にも色々と名前が知れ渡っているのだろう。

咄嗟にミロの方を振り返ったけれど、ミロはこちらを見てもいなかった。

いいよ、という声が喉まで出かかって、それでも、結局その言葉は形にならないまま消えた。

ミロが僕を当てにもしていないというのならなおさら、僕だけが拗ねてかつて自分で決めたことを覆すのも格好悪いと思ったからだ。

「……ごめん。先約があって」

僕はそういって、彼が少し残念そうな表情で「そう」と呟いて僕の元を去り他のクラスメイトに声をかけるのを見届けてから、ミロの方に歩みよって尋ねた。

「ペアを組む人が居ないのなら、僕が組もうか？」

クラスの人影はもう半分ほども消えていて、残りの面々もそれぞれにペアを固めつつある。こうなっても動こうとしないということは、本当に当てがない、ということなんだろう。

ミロは、それこそ鳩が豆鉄砲でも食らったような顔をして固まり、目を見開いた。

僕が声をかけるなどとは思ってもいなかったのか、それとも、僕とは最初からごめん被る、と思っていたのか。

「心当たりがあるようならいいけれど？」

望まれていないのなら、歩み寄るのもばかばかしく思えて、そう言って踵を返そうとしたとき、追いすがるように返事が返ってきた。

「いや、正直、困っていたから、カミュが組んでくれたら助かる。同じ寮だし」

困っていた、ようにはとても見えなかったんだが……。

困るというのは、声をかけても、頼んでも、振り向いてもらえない人間が使う言葉だろう。

一生懸命自分から歩み寄っているつもりなのに、悪いことをしたわけでもないのに、受け入れてもらえない。

僕は、その自分を否定される瞬間が、どれほどの痛みを伴うものか知っている。

「じゃあ、テーマをどうするかは、今日の夕食にでも決めよう」

それ以上ミロの顔を見ていたくなくて、それだけ言ってミロの前を通りすぎた。

才能にも容姿にも恵まれ、両親の愛情を一身に受けて育ったミロには、愛情も関心も、自分から請うものではないのだろうな、と思い、そんな妬いても仕方が無い事を一瞬でも感じた自分に幻滅しながら。

その日の夕食を、久々に二人で向かい合ってとりながら、僕達はA4三枚にも及ぶテーマ・リストを眺めてお互いに黙り込んでいた。アカデミック・ライティングなどというものは、テーマの設定からディスカッション、論旨の展開、最後のまとめに至るまで、要は書式が重要なのであって、そういう書式のものを書くことに慣れることに意味がある。僕としては、あまり資料を数読まなくても議論を展開させやすいもの、また結論が導きやすいテーマを選んで、なるべくミロの負担を減らすつもりでいた。大事なのは、そこで自分の意見を展開することではないからだ。

ところが、ミロの方は、全くそんな計算をしていなかったらしい。ミロは、差別のカテゴリーから、僕が一番避けようとしていた単語を拾い出した。

「Homophobia」

ミロがそう口にしたとき、僕はミロが実は何もかも分かっていて、僕の誘いを受けたのかも知れないと思った。

Homophobia……。

同性愛、もしくは同性愛者に対する排斥、嫌悪。

ひとつ空けて隣に座っていた下級生が、びくりと肩を揺らして僕等を見た。こんな男ばかりの寮生活では、誰もが敏感にならざるを得ない単語だ。

僕自身、なんでもないように振る舞うのは、それなりに努力が要った。実際、僕は顔を上げてミロの目を見ることが出来なかったから、スープを掬うのにごまかしてミロから視線を外した。

「……それで、構わないよ。あまり皆進んで選びたがらないテーマだろうから、特に工夫をしなくてもオリジナリティを評価してもらえるだろう」

こちらを凝視していた下級生にも、なんの相談をしているのか飲み込めたらしい。僕らの会話に聞き耳を立てるのを止め、また彼らの会話に戻ったのが分かった。ミロが、ほっと息を吐いた気配がした。

僕は、ミロの鋭い勘が、僕のミロに対する執着を見抜いてい

ることは知っている。ただ、彼はそういう部分で耳年増ではないので、それを単に居心地の悪いものだと思うばかりで、具体的な可能性を考えているとはこのときまで想像していなかった。

けれど、この膨大なリストの中からこの単語を選び出したのには、きっとそれなりの意味があるに違いない。

……つまり、ミロは、僕の彼に対する執着に気づいていて、それに嫌悪感を抱いている、ということだ。

そして、その嫌悪感を克服したいから、あるいは僕がこの問題をどう考えているかを暗に探るために、こんなものをテーマに選んだのだろう。

そうまでして友人でありたいのか、友人であり続けることで僕をその道から救い出したいのか、それとも、あるいは、自分を想うのは迷惑だから止めてくれ、という遠回しのメッセージなのか。

どちらにしても、そのミロの努力と、必死さが、僕にはなんだかとても気の毒に思えた。

嫌悪感を抱いたからといって、ミロが申し訳なく思う必要はどこにも無い。実際に普通ではないのだし、自分自身がその執着の対象になっているとすれば尚更生物学的にも正常な反応だ。その上、おそらくミロは、過去に同性からの性的暴力を受けている……。

尊敬する先輩の関係は認められても、自分自身に関わることとなれば、寛容では居られないのも当然の話だ。

それなら、僕は、あくまでミロにどんな負担もかける気はないことを伝えてやればいい。

僕は、そのテーマを受け入れる代わりに、ひとつの注文をつけた。それは、ディスカッションの役割分担で、僕がHomophobiaの擁護側に回る、ということだ。

ディスカッションというのは、本来あるテーマに対し自分の意見があり、それに沿ってテーマに対して賛成の立場と反対の立場に分かれて議論を交わす。けれど、ものごとを多角的に見る訓練のため、ディスカッションの授業では、敢えて本来の自分の意見とは反対の立場に立って議論に参加する事もよく行われる。

僕はこういった立場の入れ替えが得意で、ウォルトと二人で延々立場を入れ替えながら六戦ほど手戦を戦わせたことがある。クラスメイトから、「よく舌の根も乾かぬうちに全く逆の論戦が張れる」と二人共に呆られたくらいだ。

ミロもその事はよく知っているはずだけれど、一度だけ、擁護側にまわる、と言った僕の顔色を心配そうに伺っていた。けれど、結局、彼自身がこれを擁護するのは難しいから、とその役割分担を受け入れた。

「一番問題なのは、この問題が、マイノリティに対する大多数の圧力であるという事実を排斥できないことだ。意見を述べ合ううちはいい――でも、ひとたび生理的嫌悪感と結びつけば、

大衆はパニックに煽られるようにして同性愛者を排斥する。そこには、冷静な議論も何もないだろう？　そのほかの側面、たとえば政治的な圧力とか、宗教的な圧力は、別に同性愛者に限ったことじゃないから、この問題だけを取り上げて議論しても仕方がない。問題は、自分と違うものを排斥しようとする人間の本能を、いかにコントロール出来るか、ということなんじゃないのか？」

「人間は社会で生きるように進化してきた種族だよ、ミロ。生物学的に、こんなにも弱でかつ多産でもない種族が生き残る唯一の策が、社会を築き個々で足りない部分を補い合うことだ。だからこそ、社会に馴染まない者、秩序を乱す者に対する本能的な恐怖がある。我々はその恐怖を、それが心地よいものではないという理由だけで悪いものと看做すけれど、それは本当に正しいか？　社会をひとつの生命体とみれば、それは立派な防衛本能じゃないか」

「論点がずれてるよ、カミュ。社会はひとつの生命体じゃないし、僕ら人間は自分の意思で社会に参加しているんだ。自らの意思をもたない体の細胞とはわけが違うよ。俺は、人間だからこそ、その恐怖をもっと理性的なものに置き換えることができるはずだと思う」

「すれていないよ。恐怖というのは、言葉を必要としない意思伝達手段、もっといえば、有無を言わさない強制力だ。君の言うように、人間には個々の意思があるからこそ、理性では本当の意味での強制力にはならない。だれもが自分の考えを持ち、好きなように生きようとする中で、再び複数の人間を束ねて固めることが出来るものは理性に依らない原始的な感情しかない。恐怖も、快楽も……。だからこそ、人は、同じ恐怖を共有するもの、同じ快楽を共有するもので社会を形成する。いくつもの国がその原理を用いて国を束ねているのは、それが人間の集団の原理に叶っているからだ。アメリカのように、いつまでも外に軍事的な敵を作って纏めようとするものもあれば、日本のように、外から与えられた「平和」の快楽に浸ることで形を保っているものもある。それを否定すれば、社会は内側から崩壊する」

「恐怖が集団の結束を固くする、ということは認めてもいいよ。でも、恐怖に向かったって、冷静になることは出来るのが人間だろう？　そうすることで、もっと建設的な道も見えてくるんじゃないのか？　性の嗜好に対する恐怖や嫌悪の強さは、何か、他の差別における拒絶感と比べても、もう一段階感情的だ。それは、性の問題そのものがタブーとされているからかも知れないけど、本当のところは、タブーであるが為に直視しないから、どうしても現実から浮遊した感情論に走ってしまうんだと思う。タブーであることがいけないとは言わないけど、タブーであるが故にものごとを直視しない事で、余計に問題をややこしくしていないか？」

「冷静に直視してしまったら、恐怖は恐怖ではなくなるよ。その意味では、君は正しい。でも、恐怖の抑止力はその瞬間になくなってしまうだろう。僕は、別にHomophobiaが正しい

と言っている訳じゃない……けれど、人がそういう感情を持つところまでなら至極自然だと思うし、かならずしも矯正しなければならないようなものでもないと思う。実際に排斥行動を起こして裁かれるのは相手の基本的人権を傷つけたからで、Homophobiaだからじゃない。でも、基本的人権なんて、国によって変わるからね。

同性愛という形態そのものは、生物的に考えれば意味をなさないし、社会的に考えても殆どの社会であまり利益にならない。多くの女性が、本当に子どもを欲しいと思っているか？　何をどう分担しても、生物学的にどうしても女性に負担が大きくならざるを得ない子育てという作業を、彼女達に選ばせるものは何だ？　勿論、家族への愛情がその第一の理由だろうし、そこに生き甲斐を感じる人も多いだろう。けれど、もしそこに別の選択肢があったなら……もし同性のカップルが社会から男女の夫婦で生きることと同等に認められ、その方がより公平に自分の人生を楽しめる、と思ったとき、彼女達のうちのどれだけの数が男性と結婚しない道を選ぶか、僕には想像出来ない。そういう恐怖を持つ人間もいるだろう」

「だけど、そんなの別に同性愛者じゃなくたって起こりえるだろう？　現実に、男女の夫婦でも子どもの数は減っているし、子どもを持たない選択をする夫婦だっているじゃないか。そこを規制したって意味ないよ」

「意味なくはないよ。人間にはまだ少し本能も残っているのだから、適齢期の男女がペアになればかなり高い確率で子どもが出来る。最近の出生率の減少は、結婚する男女が高齢化して生物的な適齢期を逃していることと、金銭的な理由によるものが大きい。一番致命的なことは、同性愛のタブーに対する恐怖が外れてしまえば、僕らのような思春期の人間が数多くそちらに迷い込んでしまいかねないということだ。なにしろ、僕らにとって、まだ異性は宇宙人のようなものだ。……ならば、気心の知れた同性の仲間に、より深い理解と充足を求め、それが愛情に発展してしまうことだって、あるんじゃないのか？　そしてその関係の居心地の良さが、異性と関係をもつことで得られる充足感を上回ってしまったら、それは社会問題になりかねないよ」

それから数週間、僕達は度々食事の席や談話室などで、そんな議論を繰り返した。ミロは、最後まで感情的な差別に否定的な態度を崩さなかったけれど、僕が述べる反論に対しては、時々ひどく傷ついた表情を見せた。僕だって、感情的な差別が良いとは本当は欠片ほども思っていないし、自分自身は何があってもそれはやらない、と心に決めている。それは、僕自身がかつてそういった差別の対象になり、そのときに負った傷はどんな理由をつけても正当化されるものではないと思っているからだ。

けれど、それを他者に強要出来るものではないことも、その長い戦いの中で得られた教訓だった。

相手が、自分の何かに恐怖することを認めること。その恐怖

に一度は理解を示すこと。そしてその上で、諦めずに、こちら側に対する理解を求め続けるということ。結局、そこにしか本当の理解への道は開けない、と身をもって学んだからだ。

その覚悟がないのなら、それが出来ないのなら、誰の恐怖の対象にもならないよう息を潜めて生きていくしかない。実際に、社会の中では、その窮屈さに耐えて暮らしている人間も多くいる。皆、どちらかを選ばなくてはならない……でなければ、自分がそのままで認められる社会へ、移動するしかないのだ。

ミロは後者の例だ。彼は彼であり続け、誰かに理解を求めたことも、あるいは排斥を恐れて自分を集団に融け込ませようとしたこともなかった。けれど、専科へ転科したことで、最早彼は周囲に会わせる必要はなくなった。個性を何より重んじる専科では、人と異なるということは勲章になりこそすれ、マイナス要素にはならない。これから先、彼が音楽の世界で生きる限り、普通科で受けたような排斥を味わうことはないだろう。そしてそれこそが、僕が彼を専科に無理にでも押し込もうとした理由のひとつだった。

ただ周囲に染まないから、という理由で否定されつづけると、自分の中に眠っていた善いものまで力を失っていく。ミロの素直さや純粋さが、そんな理由で傷つけられていくのは、僕には耐えられないことだったからだ。

こういうのを、まさしく身勝手な執着というのだろう。

ミロの意思なんて関係ない。僕は、今のミロに消えて欲しくないから、ミロにも黙ったまま、彼を専科に押し込む計画を押し進めた。そのためには、ミロの事を騙しもしたし、その結果随分ひどく傷つけた。

けれど、ミロには、僕にどうあって欲しいか、などという希望はあまりないらしい。僕がピアノを止めてしまっても、彼と以前のように接する事を止めて距離を置き始めても、そのことに不満を抱きこそすれ、僕自身をどうこうしよう、という意思は見えなかった。むしろアイオリアの方が、白紙回答をした僕を「らしくない」と表現したり、一昨年の秋に馬鹿なことをして酷い風邪で一週間寝込んだ後も「気が緩んでいるぞ」と苦言を言ってくれたくらいだ。

分かっている、と、何度も自分に繰り返す。

ミロにとって、今も昔も、自分はそこまで特別ではなかった。それでも、ミロは彼なりの基準で、多分僕を特別な友人の一人と看做した。

その基準の差を責めても、意味がないのだろう。それこそ、自分の基準に合わないからといって排斥する行為と変わらない。けれど、その一方で、こちらの基準を理解する努力もして欲しかったと願う心もある。ミロは僕が隠していた秘密を力ずくで暴き、どうしても言葉に出来なかった希望を一言で言い当てて見せた……その熱と、彼の僕という人間に対する無関心とが、僕にはどうしても結びつけられなかったのだ。

こんなに理解しようと努力しても、ミロの生きる世界の基準が分からない。

一体ミロには、たとえ自分が一時相手に憎まれてでも、相手

の善いところを守りたい、と思う感情はあるのだろうか、と思う。もしかすると、彼はそういうところで本質的に人間に無関心で、彼が本当に我が身を顧みずに全てを捧げる対象は音楽にしか無いのかもしれない……たとえば、あれほど嫌われたポールの声に対して、最後までサポーターでありつづけたように。

もっとも……演奏家なんて、もしかしたら皆がそんなものなのかもしれないのだけれど。

社会学の授業で組んだことは、結果的には僕等の間の重苦しい緊張を軽減するのに貢献した。口実つきではあったけれど、以前のように食事も一緒にとるようになったし、喋る機会が増えてオーケストラでもそれほどぎくしゃくとはしなくなった。そして、多分一番大きい変化は、僕自身が、ミロの音楽をきちんと聴こう、という気になったことだ。

クリスマスにミロとジョシュアが披露したクロイツェル以来、僕は素直にミロの音が聞けなくなっていた。コンサート・マスター席のミロの音は、数十人の弦楽器の総奏の中にあっても聞き分けられるほど際立っていたけれど、僕は意図的にそれを拾わないように気を配っていた。

自分でも情けない嫉妬だという自覚はあるけれど、あきらかにもう普通科の音とは異なってしまっているミロの音を聞くと、あまりに大きく開いてしまった自分達の距離が辛く、息苦しかったからだ。

けれど、久々にディスカッションを展開してみたら、ミロは相変わらず普通科に居た頃のミロのままだった。当たり前のことなのに、僕はそのことにとても安堵して、そして逆に彼の成長を素直に認めよう、という気になった。

もともと、ミロに音楽をやってほしくて仕組んだことだったのに、その彼の音楽から遠ざかるなんて馬鹿げている。

一月末、ポールから専科のパフォーマンス試験の日程を聞かされて、ポールの試験を聞くならミロの試験も一緒に、と考えてスケジュールを調整した。

音楽棟からも他の講義棟からも離れているクィーンズベリ・ホールは、演劇専科と音楽専科の共有の建物で、普通科の学生は行事や大きな集会の時くらいしか足を踏み入れることがない。二百席ほどの小ホールの客席には、普通科の学生など一人もおらず、皆ハウスカラーのストライプに金のラインが入った専科生のタイをしていた。

入場制限がないとはいえ、演奏会ではなく試験なのだから、当然といえば当然だ。

声楽科のポールは午後の比較的早い時間にシューベルトの「冬の旅」から三曲、ヴァイオリン科のミロは午後最後のプログラムで、パガニーニのカプリースから一曲と、ベートーヴェンのソナタ8番から第一楽章を演奏していた。

二人とも、もとから専科にいた学生にひけをとらない堂々としたパフォーマンスで、この半年の彼らの成長ぶりをよく発揮していた。

ミロの演奏の時には、客席にジョシュアの姿もあった。優秀なピアニストながら、オーケストラではヴァイオリニストとしての一面も持つジョシュアは、どうもミロのヴァイオリンを目標にしているらしい。ミロが入学当時にサガ先輩に憧れたように、ジョシュアもいつも熱心にミロの演奏を見詰めている。

そのジョシュアが、ミロの演奏が始まる前、目立たないように一番後ろの座席に居た僕の方を見た。

僕が来ていることに気づいただろうか。

そう思ったけれど、僕も物理の実験の途中に抜けてきた身だったので、ミロの演奏が終わるとすぐ、ジョシュアに声をかけずに実験室に戻った。

それからたった二十四時間の間に、一体何が起こったのか、僕は未だに知らない。

はっきりしているのは、すくなくともその日の昼、昼食を共にとった時までは、ミロの態度は普通であり、僕が昨年仕組んだ事も、最後に彼を裏切って専科に行くことを止めてしまった理由にも、まったく気づいていなかった、ということだけだ。

僕が専科の試験を聴きにいったことが何かのきっかけになったのか、それともあの時何か言いたげにこちらを見たジョシュアがミロに何かを言ったのか、それすらも分からない。

ただ、翌日、交響楽団の練習後に「話がある」と近づいてきたミロは、その時点で僕のこの一年の行動の理由をほぼ掴んでいた。疲れきったような、顔の全ての表情筋が笑う事を放棄してしまったような、ひとと動かない静かな表情の中で、ミロはこう切り出した。

「どうしても、腑に落ちない事がある」

その一言で、僕は、ミロがもうとうに片付けたつもりでいた問題を蒸し返すつもりなのだと知った。ミロの声は最初かすれていて、彼自身も、これから言おうとしている事に緊張していることを思わせた。

その話はもう止めよう、済んだ事だから、と言った方がいいのかも知れない。

僕はそう思ったけれど、ミロは、僕にそれを言わせるだけの時間を与えなかった。

「一つ目、カミュは何故専科に行くのを土壇場になって止めたのか。熟考の末に自分には職業音楽の道は合わないと思った。おかしくない答えだ。でも、そうするともう一つ新しい疑問が生まれる。

どうして、カミュは実技の試験をキャンセルしなかったのか。実技は筆記試験の後だ。筆記試験の段階で転科の意思を放棄していたんなら、これはおかしい。加えて、俺にわざわざ実技試験を聞きに来てくれとまで頼んだ。

転科する意思は無い。けれど、俺にはあのシャコンヌを聞かせたかった。これは、どうしてだろう？　どんなに奇妙な答えでも、可能性をひとつひとつ潰していってそれしかなかったら、それが「答え」だ……そう考えると、カミュにとっては、自分

が専科に行くことよりも、どうやら俺を専科に行かせることに意義があったんじゃないかと仮説が立てられた」

ひとつひとつ、固く結んで隠した糸が解かれていく。それと同時に、僕の中で固く痼りになっていた感情の糸も解かれていくのを感じた。全部解けてしまえば、そこにはもう偽りもごまかしも効かない、生の感情が隠れている。ミロがそれに正面から向き合ったとき、おそらく僕達がこれまで上辺だけでも続けてきた友人関係は木っ端微塵に砕け散るだろう。

それだけは、させてはならない、と思った。僕達は、団長とコンサート・マスターだ。不仲になってはならない。

心臓が鼓動を早め、意識がクリアに研ぎ澄まされた。最悪、ミロを無理矢理専科に押し込もうとしたところまでは、話してもいい。むしろ、それを認めることで、その裏に隠れているものを隠す事が出来るかもしれない。

ミロにそういう小細工は、時としてとても危険であることは分かっているけれど……。

ミロがどこまで読んでいるのか、ミロの言葉を拾う全身が耳になったように感じた。

「そして、この仮説にそってもう一度一年間を振り返ってみると、カミュが、本当にさりげなく、注意深く俺から転科に対する希望を引き出したのが見えてきた。

決して強くは勧めず、かといって無関心にもならず、ちょうどいい距離で話を聞き……それだけじゃない。自分も転科すると俺に言った。カミュには分かってたんだ。カミュが行くと言えば、それがどれだけ強く俺の中に影響するか。ウォルトやマックス、アンソニー達が言うんじゃない。俺が特別に思い入れてた「カミュ」が言うんだ。訳が違う。

最初から、カミュは俺に対する負い目を持っていたんだ。カミュは、どうしても俺を専科に行かせたかった」

淡々と、ミロの言葉は続く。それを聞きながら、僕は、どこで、どうやってこの話を打ち切るべきかを考える。

けれど、本当は、心の底では打ち切りたくなどなかったのかも知れない。

ミロが辿り着いた答えを、最後まで聞いてみたかったのかも知れない。

なぜなら、その後も僕はついに一言も発する事ができなかったのだから。

「それは、カミュが俺と別々のコースになって距離を作りたかったからなんじゃないか、とも考えた。けれど白紙回答を出す決心をした時点じゃ、まだ俺の合否はまだ決まってなかった。二人共落ちてまた普通科コースで一緒になるか、それとも運良く俺が受かって別々のコースを進むか、細かい可能性を考慮に入れなきゃ五分と五分。それに、本当にコースを分ける事だけが目的なら、カミュ一人が転科試験を受験すれば良かっただけだ。わざわざ俺をそそのかすような真似をしなくても。だから、この説も無し。

カミュが、お節介を焼いて俺を専科に叩き込んだっていうのも、あり得なくはない。けれど、そうすると、カミュがピアノ

に打ち込んでいたあの気迫の説明が出来ない。

カミュの第一目的は、俺を専科に入れることだった。そして、あの白紙回答を出すまでは、自分だって専科に行くことを考えていた筈だ。それは、カミュの音楽がどんなに上手い言い訳を作っても、カミュの音楽が違うって言ってる」

思わず、固く両手を握りしめた。

僕の音楽が、何だと？

冷静でいなければならない、と歯を食いしばっても、その言葉を聞いた瞬間胃の底で冷たく燃え上がった火を鎮めることは出来なかった。

……何故、今になって、そんな事を言うのか。

僕がピアノを投げ出してから、半年以上もの間、僕のピアノのことなど一言も口にせず、ただ僕の裏切りを詰ることしかしなかったくせに……

ミロの言葉は、僕が予想していた以上に核心に迫っていて、僕はこのときにこそ、ミロの言葉を遮るべきだった。けれど、胸の中はそんな悔しさで溢れ帰っていて、最早冷静に状況を判断出来る状態ではなくなっていた。

そうして、僕は、ミロが秘密の一番心の部分に辿り着くのを許してしまった。

「カミュが夏休みの間中俺を避けていたのは、カミュが専科に行くのを止めた理由が、職業音楽家になるのを躊躇したというのでも、学科試験が間に合わなかったからでもない……多分、俺に関係する何かが原因だったから……だから、俺には何も言えなかったんだ。そうじゃないかな、カミュ？」

……完敗だ。

ミロは、もう殆ど真実にまで辿り着いている。

ここまで読まれてしまって、この上一体どんな言い訳が出来るだろう……。

息をつめてミロを睨みつけていると、駄目押しの一言が被さってきた。

「きれいな、筋の通った答えは要らない。きっとカミュが夏中考えた言い訳だ。よく出来てるのは分かってる。俺は、そういうのは必要ない。本当の事が知りたいんだ。どうして、カミュは全部放り投げてしまったんだ？　俺の、何が、原因だった？」

ミロの、悪い癖だ。

人の隠していることを知りたがる。誰も彼もというわけじゃない……何故か、僕にはそうなのだ。

でも、分かったからといって、何かが出来るわけでもない。そしてミロは、自分に対し真実が隠されたことはとても気にするけれど、僕が何故隠さなければならなかったのかについては、いつも疑問にすら感じていないようだった。

だから、ミロは知らないのだ。

そうして、必死で隠しているものを暴かれてしまったとき、僕がどれだけの精神力を動員して、それ以上を期待しないようにしてきたのかを……

「今更、それを聞いてどうする？」

声が軋んだ。表面だけでも繕わなければ、と考えていたはず

なのに、そんな計算が介入する間もなく、そう勝手に僕の心が叫んだ。

あの試験の日から、既に七ヶ月が過ぎている。今更、本当の事を知って何が出来るというのか。

僕のその返事を聞いた瞬間、ミロの感情をなくしたような疲れきった瞳が一瞬、悲しげに見開かれた。

傷ついたのだろう、と思う。自分がミロの立場だったなら、こんなことを言われれば傷つく。

けれど、僕もひどく傷ついていて、もうミロの心を思い遣る余裕がなかった。

ミロの腕がゆっくりと上がり、僕の背中を捉えた。

抗う間もなく、僕はミロの腕に抱きしめられていて、そのことで僕は更に理性を失った。

僕は、こんな同情が欲しかったわけじゃない。

ミロが真実を知ろうが知るまいが、僕のした事も、失ったものも変わらないのに。

僕の選択にミロが絡んでいたからといって、今更ミロが僕の選択を惜しむ理由にはならない……。

可哀想に、と、そう言われているような気がして、それがあまりにも痛くて、屈辱的で、放せ、と滅茶苦茶に喚いてしまいたいのに、体は凍り付いたように動かなかった。

その時だった。

ミロが薄く瞳を閉じ、こちらに顔を近づけて、彼の唇を僕の唇に押し付けてきたのは。

何かが、頭の中で焼き切れた。

時間の感覚が、滅茶苦茶にスクランブルされたようだった。

僕から離れていくミロの手の動きはスローモーションを見るように覚えているのに、そこから先はまるで忙しない映画の予告編を見ているようで、ロバートホールの暗い階段や、雨に濡れそぼっている芝の緑や、遠くで光っている稲妻や、そういったものが次々と視界に現れて消えた。気がつけば、僕は雨の中芝の上を闇雲に走っていてぬかるみに足をとられ、ミロに追いつかれて、水の張った芝の上に思い切り叩き付けられていた。

「離せッ!!!」

怒鳴り声と共に、剥き出しの憎しみをぶつけた。一体どんな権利があって、僕にこんな仕打ちをするのか？

僕がミロに下心を抱いているのを知っていて、キスをすれば大人しくなると思ったのか。

蹴っ飛ばしてでも逃れてやろうと渾身の力で抗う僕に、ミロの怒声が降ってきた。

「離せるかッ!!!」

ミロは歯を食いしばり、恐ろしい形相で僕を睨んでいた。後に、このときミロは僕が自殺する可能性を疑っていたのだと聞いたけれど、このときは、そのあまりに厳しい表情に意表をつかれて、それで少しだけ混乱した思考が秩序を取り戻した。

一体どういうつもりなのか。

ミロの唇が自分の唇に触れた瞬間を、生々しく思い出した。いくらミロに一般常識は当てはまらないといっても、あんなのは流石に普通じゃない。あれは、ミロの普通以上の好意の証だ。

でも、ミロの普通以上の好意とは、一体何なのか？

キスまでのプラトニックな好意？　それとも、そんなカテゴリーにすら当てはまらない、ミロにしか分からない尺度の好意？

「どうして、今さら、そんなことをするんだ……！」

本当に、今更だ。今、ミロが僕に彼の特別な好意を伝えることになんの意味があるだろう？

半年前の大喧嘩から、ずっと冷戦状態だった関係を改善したいのか？

それとも、「今更それを聞いてどうする」という僕からの問いへの答えが、あのキスなのか？

「今さらじゃない。凄く大切なことだ。カミュにとっても、俺にとっても……！」

ミロが、まるで物事は終わっていない、とでも言わんばかりの口調でそう言って、僕はそのことに苛立ちを覚えた。

人ごとなのだ。所詮、ミロにとっては。

ミロがここまで拘るのは、僕のした選択にミロが関わっていたことに対する罪悪感があるからだ。その罪悪感から逃れたいがために、今頃になって、僕の時間を六月の分岐点にまで振り戻そうとしている。

「本気でそう思っているのか？　今から何か変わるものがあるというのか？」

いいながら、僕は、そんなものがあるわけが無い、と冷笑した。

ミロの想いにも、失った未来に未練を叫ぶ自分の心にも。

けれど、ミロはそれでも怯まなかった。雨で重く水を吸った制服の腕を僕の背中に回して、痛みを感じるほど強く僕の体を抱き締めた。

「……変わって欲しいし、変えたいと思う？……！」

その呟きは、雨に融けて、熱い吐息とともに僕の耳に滑り込んできた。

……どういうことなんだろう？……

ミロの熱を、どう計ったらいいのか分からない。

ミロが僕に好意を抱いてくれていることは、最初から知っている。けれど、その好意の温度を僕はいつも計り間違えて、その度に痛い思いをしてきたのだ。

ここまで僕に執着するミロの熱は、まるで僕がミロに抱いているものと同種のもののように見える。それなのに、そのつもりで少し踏み込んだ誘いをかければ、ミロは居心地悪そうに身を引いてしまう。

第一、ことの真相が分かったからといって、今更「変えたい」というのはあまりにも身勝手ではないのか。

「嘘吐き」

本当に悪いのは決してミロではないと分かっているのに、僕の中にこの状況を誰かのせいにしてしまいたい自分がいて、それがついに暴走を始めた。

「君は僕の歌には物凄い執着を見せたけれども、ピアノにはそうじゃなかった。子供の声は、どうしたって失われる……。僕には、どうする事も出来ない。でも、ジョシュアのピアノには、君は最初から釘付けだったじゃないか？　ピアノなら、もうジョシュアが居る。それなら、なぜ、自分がそれほどいいとも思わないものに固執する？」

ミロが今の僕を変えたいと思う理由が、かならずしも僕のピアノに惹かれているから、という理由である必要はない。僕の反論は、実はミロが僕のピアノに興味を示してくれなかった事に対する恨み言でしかなく、僕は自分が巧妙に論旨をすり替えて全ての責任をミロに被せようとしていることに気づいていた。けれど、一度走り出してしまった感情は、既に制御の術を失って僕自身にもどうにもならなかった。

「カミュと同じだと思ったから……！　ジョシュアのピアノは、カミュのと同じだったから！」

「僕との『雨の歌』は三回で逃げ出して、ジョシュアとはあんなに楽しそうに弾いていたのに？」

心が軋んだ。くだらない嫉妬だ。けれど、かつてアルトの声がまだ僕に残されていた頃、ミロは僕がミロのヴァイオリンに惹かれるのと同じように、僕の声を愛してくれていた。その、多少の障害などものともしない情熱をミロから向けられなくなって久しい。少年の声を失ってから、僕が一番素直でいられるピアノの音の世界で、ミロは遂に僕の声に耳を傾けようとはしなかった。

誰の声も聞かないのなら、ピアノに興味がないのだと諦めることも出来る……けれど、ミロは、ジョシュアの「声」には真摯に耳を傾けたのだ。

「覚えていないのか？　もう一昨年になるんだな……十一月に、僕は酷い風邪をひいて一週間医務室に居た。その間に、君はジョシュアに誘われて専科の授業オケのエキストラになると決めて、授業の後は……二人で『雨の歌』を弾いていた。僕と弾いていた時、君は凄く弾きづらそうに音を出していたけれど、ジョシュアとならのびのびと曲を楽しんでいたよ？　君は僕には隠していたけれど、僕はこの目で見たし、自分の耳で音を聞いた。偶然だったけれどもね」

ミロが、両目を見開き、何度か口を開けては何も語ることなく閉じる動作を繰り返した。呆れてものが言えない、というところか。こんな子供みたいな嫉妬を聞かされて、なんと返答してよいものか、言葉がないのかも知れない。

けれど、僕にとって、それはミロがそれまでに僕に与えてくれた好意の全てを疑うに十分な裏切りだったのだ。

ミロは、僕のことを大切な友人だと言ってくれる。

けれど、僕の本当の「声」にはついに真剣に耳を傾けてくれなかったし、僕の隠しているものをこんなにも正確に言い当てる観察力を持ちながら、僕のミロへの想いだけは決して見ようとしなかった。

時折、自分の中から声が聞こえる。「ミロにとってお前は本当は、もっとも便利な友人というだけのことだ」と。

「なんで、こんな僕にそんなにも執着するんだ？　……こんな僕にも、まだ利用価値があると思う……？」

だから、そのときそう聞いたのは、もう、頼むから気づいてくれ、という僕からの懇願だった。

僕はもう、ミロの好意を得るために支払う対価を持ち合わせていない。ミロ自身が七ヶ月もの間、惜しむ事のなかったピアノを取り戻すために、そんなに必死になる理由など本当はないのだ。

その時、ミロの悲鳴のような叫びが逆った。それは、僕の全く想像もしなかった内容で、僕の呼吸をその瞬間止めた。

「違うッ！　利用とか、そんなんじゃないッ!!　俺が利用したのは、むしろジョシュアの方だ！　ジョシュアには、練習台になってもらってたんだ!!　カミュとまた『雨の歌』を弾くために！」

一瞬、頭が、ミロの言葉を理解することを拒否した。

ジョシュアが、練習台……？

まさか……。

それなら、あのとき、ルクレールを合わせたあとに、ミロが「雨の歌」を弾こう、と言ったのは……

「カミュが弾きたい曲をちゃんと弾いてないって分かったから、カミュ風邪をひいて――ああ、違うっ。その前に、凄く怖い目に遭ったし、いつも俺ばっかり我が儘言ってたし、喜ばせたくて、カミュがこの『雨の歌』が凄く好きだったんだって気づいたのが、ロンドンの楽譜屋で……!!」

心臓を、ものすごい力で握り潰されたように感じた。

そんな事が、本当にあり得るのか。

ミロが、僕を怒らせないために適当な事を言っているのではないか？

たった今初めて聞いたミロの「真実」を俄には信じられなくて、そんな事を考えた。

けれど、本当は、誰よりも僕自身が知っている。

ミロの語る言葉は常に真実だということ。そして、彼の主張には、一点の矛盾もないことを……。

あのとき、ロンドンの楽譜屋で、僕は確かに、ブラームスの楽譜を見ていた。

ミロがそれに気付き、そのあと不調が続いた僕のために、もう一度「雨の歌」をやろうと考えたのだとしても、なんの不思議もない。

そして、ミロは、あの日きちんとこう言ったのだ。

「ジョシュアにブラームスの練習を付き合ってもらっていた」と。

その言葉を、ミロが僕に秘密の練習が知れたと気付いたため

に咄嗟に口にした嘘だと、猜疑心に駆られて穿った見方しか出来なかったのは、僕の方だ。

つまり僕は、自分の勝手な思い込みで絶望し、本当は僕との共演を望んでくれていたミロに恐怖し、自分の進路を決めてしまったのだ。

血液なんて、今まったく体を巡っていないのではないか。目眩がするような喪失感の中で、ミロの腕に囲われながら、僕はただ、すぐにこの場から逃げなければ、と思った。

もう、何も知りたくなかった。ミロに合わせる顔もない。

「もう何も聞きたくない。どいてくれ」

力の入らない腕を引きずり上げるようにして、ミロの体を押しのけた。

体が震えて、歯の根が合わない。膝が砕けてしまいそうになるのを、一足、一足、地面の上に立っていることを確かめながら歩く。ミロは、もう追って来なかった。

……ミロと、一緒に、弾きたかった。

一足踏むごとに、後悔が胸に押し寄せて呼吸を圧迫する。

たいした運動をしているわけでもないのに、息が荒く乱れ、白い煙のような水蒸気が散る。

ピアノを職業にすることを、最後の最後まで迷い抜いたのは事実だ。

けれど、その道をミロが一緒に歩んでくれるなら……

そんな怖れが見えなくなってしまうほど、本当は、ミロと一緒に音楽を奏でたくて、たまらなかった。

いつまでも……叶うなら、いつか僕達が年をとって、楽器を手放す日まで。

重くたれ込めた雲から、大粒の雨が降る。

あてもなく雨の中を彷徨い続け、気がついたら、教会の丘に居た。

暗闇の中、礼拝堂のほのかな明かりを見たとき、ついに緊張の糸が切れた。

両足が砕けて、水浸しの芝の上に膝と両手をつく。溜まり水が跳ねて、目に飛び込んだ。

「……Ahhhhh ――――――――――!!」

これまで空気しか漏れてこなかった喉が震え、声が溢れる。

僕は、物心ついてから初めて、叫びながら泣いた。

時間は誰の上にも平等に過ぎていく、と言う。

そして自分の時間も。

ときには永遠に続くと思われるほど進みの遅い時間も、気がつけばいつの間にか過去のことになっている。

僕のあまりに馬鹿馬鹿しい、けれどその一言で片付けてしまうにはあまりにも重い勘違いが発覚して、五日が過ぎた。

あれから、教会の丘で、どのくらい長い間うずくまっていたのか分からない。一月だというのに酷い雨で、全身は最早氷のようで、このままでは凍死する、と気づいて残りの丘を上った。

礼拝堂の扉を押し開けると、まだ鍵はかかっておらず、僕はぼんやりと淡いオレンジ色の光に満たされた聖堂に潜り込み、一番暖かい場所を探した。

今も聖歌隊の一員である僕は、それが二階の合唱席であることを知っている。こっそり二階に上がって、階段に腰を下ろして蹲まり、重く水を吸った制服の上着を脱いだ。

このままだと、また風邪をひく。

馬鹿なことをしているという自覚はあったけれど、寮に戻ろうにも、仲間にどんな顔を見せればよいのか、分からなかった。

と、そのとき、二階に続く階段をゆっくり上がってくる足音があって、僕はその音の方へ顔を上げた。

「……随分と酷い格好だ、バーロウ。喉を痛めるよ」

ヒギンズ神父だった。神父は、既に両手に何枚ものタオルと、毛布を手にしていた。

「これで、可能な限り雫を拭きなさい。今、暖房を入れたから、すぐに暖かくなる。何か、暖かい飲み物を持って来よう」

「……いえ……大丈夫です」

僕は、そう返答したつもりだったけれど、その声は掠れて神父には届かなかった。

「気分が落ち着くまで、ここに居て構わない。何か話したいことがあれば、聞こう。……でも、何か飲んで、体を暖めてからだ。わかるね？」

穏やかに諭されて、頷くしかなかった。神父は、一度一階に降りて、舌が焼けそうなほど熱いインスタントのポタージュスープを持ってきてくれた。

毛布に包まり、三十分くらいかけてその熱いポタージュを飲んだら、漸く人心地がついた。それから一時間ほど、ぼんやりと宙を眺めながら、ミロの言葉を反芻していた。

映画のフィルムにでも焼き付けたように、ミロが語った言葉も、そのときの表情も思い出せる。血の気を失った頬や、いつもは溌剌として表情豊かな瞳が殆ど動かなかったこと、疲れきった声、力の抜けた手……

けれど、その瞳が必死な色を浮かべて「違う」と叫んだところで、映像は激しく歪み、僕は目を開けていられなくなる。その次の言葉が聞こえないよう、記憶も、五感も、滅茶苦茶にスクランブルされて思考がストップする。

まだ、現実に起きたことを認められないんだ。

何度か記憶を整理しようとして失敗し、僕はそう諦めた。いつものことだ。何か嫌な事、辛い事、思い出したくない出来事が起きたとき、僕は一時的にその記憶にアクセスすることを放

棄する。あまりよくないのだろうな、と思うけれど、無理にそこに意識を集中すると実際に目眩や動悸を伴うので仕方がない。記憶はなくなるわけではないので、数日間、数週間か、ことによっては数ヶ月経ってからまたその記憶に戻り整理することは出来る。それまでは、起きた事実のインデックスにアクセス出来るだけで、記憶の実態を伴わないそれはまるで他人事のように実感がない。

記憶の一部をまるでなかったことのようにすっ飛ばしてしまう事には、良い面もある。周囲に、必要以上に波風を立てずに済むからだ。

僕はヒギンズ神父にお礼を言って寮に戻り、いつも通り仲間達と話し、それなりに冷静にハウスマスターのベネット氏の質問にも答えた。その日は、そのまま週末まで何事もなかったかのように振る舞えると思っていたけれど、翌日には、前日に見て見ぬ振りをした傷口が開き始めた。

それからの三日間は、僕の記憶の中でも最悪の部類に入るといっていいだろう。授業の内容なんて、まるで頭に入らなかった。考えていたのは、僕にまだ去年の六月の選択をやり直す道があるのか、それだけだった。

十七歳という年齢、現在の専科の進度、他の音楽院のレベル、将来の就職先、経済的な問題、自分のピアノのレベル……

何度考えても、何をどうシミュレーションしても、答えはNOだった。もともと、去年の六月の時点でさえギリギリだと言われていたのだ。転科するにしても、今年の九月まで待たなければならない。教師側にしてみれば、残り一年でものになる筈が無いと分かっている生徒の転科を受け入れるわけにはいかないだろう。一年留年すれば卒業は可能かもしれないが、学科ならともかく音楽で留年した学生を受け入れるような音楽院などないだろう。

クィーンズベリをやめて私立の音楽院に入学すれば、進学の心配は減るけれど、そもそも入学試験に受かるレベルじゃない。最近は演奏家の世界は低年齢化が進んでいて、十八ともなれば国際コンクールのひとつやふたつ受けていてもおかしくない。

つまり、僕が音楽の道に進める可能性として、一番敷居が低かったのがクィーンズベリでの転科という選択で、それさえも去年の六月がタイムリミットだったのだ。

そんなことは、去年の六月にだって十分に分かっていた事で、だからこそ僕はあんなにも進路について悩み抜いた。そうして、どんな事情があったにせよ、自分で結論を出して、今の道を選んだのだ。

誰のせいでもない。

そう、自分に言い聞かせる声が、体の奥深くに沈んでいく。

誰のせいでもない。

その声が響く度に、自分の体に楔を打ち込まれるように感じる。

楔がひとつ打ち込まれる度に、心は自由を失う。広かったは

ずの空間がどんどんと圧縮されてゆき、やがて、もはや歩けるのは一筋の道だけになる。
僕が選んだ道なのだから、僕はこの道を歩く。そう覚悟を決めても、道の向こうにどんな未来が拓けているのか、その希望が見えない。
一度は、たしかにこの道の向こうに光を見たと思ったはずなのに。
思いがけないミロの告白で、自分の本当の望みを知ってしまった時から、僕にはもうその光が見えなくなってしまっていた。
どうして、いっそ黙っていてくれなかったのか、と思う。知ってもどうにもならない事なら、知らなければ良かったのに、と。
それでも、ミロが自分に特別な好意を寄せてくれていた事が嬉しい自分がいて……
もう、何を望み、何を恨めばいいのか、わからない。

今朝、久しぶりに、教会の丘を歩いた。
五日前、全身で嫌だと喚いて突っ伏した丘は、昨夜降った雪で白く覆われていた。
ひとつの足跡もない雪原に、ひとつひとつ、僕の足跡を刻んで歩く。
どこへでも行けるように見えても、好きなように歩いているように見えても、本当は歩ける場所などそう広くはないのかもしれない。
その長い旅の中で、時折流れ星のように側をかすめてゆく別の可能性を、待ち構えてその手に掴んだ者だけが、その時ほんの少しだけ道の幅を広げることを許されて、これまで歩いてきた道とは違う未来を掴むことが出来る。掴み損ねて、あとでその星の軌跡を振り返ったところで、もうその星の姿はない……。
多分人生なんて、いつも、そんなものなのだ。
人が口にするほど自由でも、可能性に溢れているわけでもない。その可能性は、ほんの一瞬現れて、すぐに過ぎ去ってしまうようなものだ。いつ訪れるとも知れないその機会を逃さない覚悟と準備をしている者にしか、見えない可能性なのだ。
ミロは星を掴んで道を広げ、少しずつもとの生活に別れを告げながら、必死で前に進んでいる。
それなら僕も、自分の道を一生懸命歩くしかないのだろう。
どんなに捩じ伏せても、消えることのない怒りがある。
選んだのは自分だと、自業自得だと何百回打ち消しても、その数だけまた心を支配する声がある。
どうして、僕の気持ちを見て見ぬ振りをしたのか。
どうして、最初から、僕のピアノに真剣に向き合ってくれなかったのか。
特別な好意を寄せてくれていたのなら、何故いつも僕の本気から逃げ続けたのか。

彼が僕の本気に本気で応えてくれていたら――僕は、あんな選択などしなかったのに、と。

でも、本当は理由が知りたいわけじゃない。そのことについて、ミロから謝って欲しいわけでもない。そんな事をしても、何も変わらないからだ。

何かをして欲しいわけでもないのに、相手に非を認めさせて苦しめたいというのは、恨みでしかない。僕は、多分そのことでミロが苦しむ姿を見たいし、もしかしたら心の底で、彼がそのせいで将来失敗すればいいと思っているのだ。僕だって、ピアノを諦めた。だから、ミロも、ヴァイオリンを諦めてしまえばいい、と。

僕の中には、怪物がいる。その怪物を抱えたまま、僕は僕の道を歩く。

殺す事ができないのなら、一生僕の中だけで生きてもらうしかない。

一生――誰の目にも触れさせないままで。

「ミロ、話がある」

オーケストラの練習が終わった後、僕はそうミロに声をかけた。ミロは明らかに緊張した表情で目を見開き、その場に固まった。

ほら、君はいつもそうだ。

苦い想いと、やっぱり、という諦めで、少し胸が傷んだ。あんなに暴力的に人の心をこじ開けたくせに、この五日間、ミロから何も接触がなかった。興味がなくなってしまったのか、自分のした事に怖じ気づいているのか。今も、本当は僕にあまり近づきたくないのだろう。

怖がるのなら、最初から手を伸ばさなければいい。

君は狡いよ、という言葉を飲み込んで、最初から決めていた言葉を告げた。

「一発、殴らせろ」

ミロは、呆然と僕を見詰めたままだった。

右手を握りしめて、力を込めた。腕を怪我させるわけにはいかない。体も内蔵に害が及ぶ可能性があるから駄目だ。となると、やはり顔くらいしか狙える場所がない。

遠慮したら却って後に尾を引くだろう。そう思って、それなりに本気で殴りつけた。ミロは避ける気が全くなかったようで、いつの間にか僕より大きくなっていた体がよろけた。嫌な手応えだった。

頼りなく揺れる体を抱き締める。呆然として反応のないミロの頬に手をかけて、自分の方に引き寄せる。ゆっくりと唇を合わせて歯茎を舐めると、少し血の匂いがした。あれは、口の中が切れる感触だったのか。右手に残った嫌な感触を思った。

ミロが硬直したのがわかった。失敗したかも知れない。そう思ったけれど、もう引き返せなかった。

「これで、全部終わりにしよう。もう過ぎた事をほじくり返す

のは無しにしよう」

ミロがなんと答えるか――その答えを聞くのが怖かった。付き合うかわりに、今までのことは水に流そう、と言ったつもりだったけれど、ミロの方に実はその気がなかったら、まったく見当違いの話だ。

けれど、ミロの返答は、まったく僕が想像してもいなかったものだった。いつものように。

「――俺が、カミュにキスした事も、今ので無し？」

「無し、って――――」

全身から力が抜けた。あんな、唇をこじ開けるようなフレンチ・キスをしたというのに、その感想がそれなのか？

「――君、今のが何なのか、わからないのかい？」

聞いても仕方のないことでも、言葉にせずにはいられなかった。せめて、今からでも、あれが何であったのか、ミロに気づいて欲しかったから。

それでも、ミロは身じろぎもせず、僕は自分の失敗を思った。何度、こんな思いをしただろう。

確かに好意を寄せられていると感じるのに、何も通じない。言葉も、想いも。

「……まあ、そういう知識を君に期待しても無駄か……」

息苦しく胸を圧迫していた、熱く疼くような想いが、少しずつ冷えていく。それならそれでもいいじゃないか、と、そんな声が聞こえて、何かを安堵に似たものが胸に広がった。やはり、ミロにとって自分はそういう対象ではないのだ。それなら、どちらにしても、僕が彼と言葉を続けていくのは無理だったのだ、と。

それならもう、話すことはない。

踵を返して、ドアの方へと歩き出した、その時だった。

「――ちょっと、待って」

ミロの左手が、僕の腕を掴んだ。

「あんな時に、突然キスしたのは悪かった。ごめん。だけど、カミュに嫌な思いをさせようとか、そういうつもりじゃなくて――――」

あまりに意表をつかれて、もう笑うしかないような衝動に襲われた。

嫌な思いをさせる、ってなんだ。

人の真剣な行為に、そう簡単に嫌悪感を抱くような人間だと思われているのか。あるいは、今僕のしたことが、嫌だったということか。

そうかも知れない。僕のしたキスは、五日前にミロが僕にしたような、触れるだけの可愛いキスじゃない。

「……嫌なんだったら、今僕が君にしたのは何だと思うんだ？」

もしかして仕返しととられたのじゃないか、そう思い当たって、僕はそう聞いてみた。

「何だと思うって……今のは、キスだ。でも、俺が最初にして……それで、カミュは――」

ミロはそこで一度口を噤み、あちらこちらに視線を泳がせた。

「それで、カミュは、……湖に向かって走り出して――――」

あ、と、思わず小さく声が漏れた。あの日、ミロは、あの後行方の知れなくなった僕を蒼白になって探していたと、あとでアイオリアから聞いた。僕は湖に向かって走ったつもりはなかったけれど、ミロには僕が自殺を考えていたように見えたらしい。そのきっかけが、あのミロからのキスだったと思っているのだろう。

同性からキスされたからといって、自殺を考える人間なんているものか。

なんだかおかしくなって、つい口元が緩んだ。

「ごめん、あれは、そういう意味じゃなかったんだ……ただ」

勢いでそう言ってしまって、その瞬間、あの時の気持ちに心を引き摺られた。息がつまって、何も言葉が出なくなった。

「……いろいろなものが、急に溢れてきて……とても、人の顔を見て話せる状態じゃなかったから」

どうして、今更特別な好意を見せるのか。

もう、何もかも遅い、という後悔と絶望で、何も見えなくなった。雨の中飛び出したのは、目の前の現実から逃げ出したかっただけだ。どこに行きたかったわけでもない。

呆然とするばかりだったミロの表情が、初めて歪んだ。それは本当に苦しげで、僕の視線を真正面から射抜いてきた。

「カミュ――何か……俺に言いたい事ない？　怒ったとか、辛かったとか、悲しかったとか……」

必死な気持ちは伝わってきたけれど、自分でも不思議なほど心が波立たなかった。ミロは、それを聞いてどうするのだろう。気にかけてくれていること、心配してくれていることは分かる。けれど、今更それを気にかけてもらっても、ミロには何も出来はしないのだ。

僕の中に巣食う怪物の影でもちらつかせれば、ミロはきっとひどく心を痛めるだろう。けれど、結局何も出来ずに、いつかその痛みに満足してこのことを忘れていくだろう。

ミロの中では、全てが過去になってゆくのに、僕の中の怪物は消えないまま取り残される。いつか必ず、そういう日が来る。

そのくらいなら、最初から何も見せない方がいい。

「当然の報いだよ。……僕には、ずっと君に隠していた下心があった。はっきり問う勇気がなかったから、色々憶測して……それで、結局それに足下を掬われた。……全部、思い込みと勘違いだったんだ。それで、自分の将来を決めてしまった。その責任は、僕以外に誰にもとれない。勿論君にも。だから、この件は、さっきの一発で終わりだ。もう、君が悩むことは何も無いよ」

「下らない意地かも知れないけれど、僕自身もそう思いたかった。どう自分に甘く見ても、やはりこの状況は当然の報いとしか言いようがない。ミロがもう少し僕のメッセージに敏感であったなら、もう少し違った未来もあったかもしれない……けれど、それは結局、僕にとって都合の良い幻想でしかない。

ミロは、顔を真っ赤にして反論してきた。

「でも、カミュが傷付いたのは本当だ。俺が傷つけたのも事実だ。それを全部無しになんてする事は出来ないだろう？　カミュ、

悔しくないのかよ？　俺は悔しかったよ！　カミュがわざと、俺が怒るって分ってて、夏中逃げまくって、俺が傷付くって分っててわざとあんな態度や言葉を言った。俺は悔しかった。だから、諦めてやるもんかと思った。カミュの言う理由になんか納得してやるもんかって……でも、結局、俺ばっかりじゃないか……俺ばっかりカミュを困らせて、傷つけて、泣かせて……それなのに俺は、なんにもカミュにしてやれてないじゃないか……！」

声が震えて、それから、奇麗な青い瞳から大粒の涙がぽろぽろと零れ落ちた。ミロは瞬きもせず僕を見詰めていて、その間にも、透明の涙は途切れることなく頬を伝っていた。

こんなに盛大に泣かれてしまっては、こちらの涙の出る幕がない。

苦笑したいような気持ちで言った。「君は、僕の諦めたもののために足掻いてくれたじゃないか」と。

「ピアノを諦めたのは、自分が思っていたほど簡単なことじゃなかったと、お陰でそう気付くことが出来た。僕の中にも、僕自身の決定を不満に思う自分が居たけれど、それを君が代弁してくれたから、僕は自分を引き裂かれずに済んだ……それは、君にしか出来なかったことだろう？　先生も、他の仲間も、僕自身でさえ、僕の言い訳に納得したんだから」

自分でも上出来だと思える言葉を返して、無理矢理笑った。その綺麗な言葉を信じ、納得して、早く自分の中の怪物を押し殺してしまいたかった。

ミロは僕の肩にしがみついて声を上げて泣き続け、僕は、これでミロの悲しみは昇華するのだな、と思った。

どんなに悲しい事も、声を上げて泣く事が出来れば、いつか時間がその痛みを和らげてくれる。

自分の事でもそうなのに、人の痛みを思う悲しみなんて、そう長く続くものじゃない。どんなに大切な人のことであっても、それはやはり何処までもひとごとでしかない。

そして、そうでなくてはならないのだ。

ミロにはまだこれから先、広い世界が待ち受けているのだから。

僕の肩で泣きじゃくっていたミロは、やがて決心したように顔を上げて、言った。

「カミュ……今年、もう一度転科試験を受けてみないか？　ウェルナー教授とか、カミュがいい感性をもっているのに、って物凄く残念がってた」

多分言われるだろうな、と思っていた言葉を、強い抱擁と共に伝えられて、ミロの背中でふっと苦笑を吐いた。

あと一年しかないのに、本気で転科出来ると考えている。普通の人間はそんな事考えもしない……でも、それがミロの強さであり、彼が音楽の神に選ばれた者であることの証なのだ。

「火曜の朝、ウェルナー教授と話をしたんだ。今から専科にコースを替えるのは、みんな色々とカリキュラムが決まってしまっているから無理だって。でも、カミュはまた今年転科試験を受ける事は出来る。普通科の授業も課題も大変だから、去年より

難しい挑戦になると思う。――合格しても、簡単ではないだろうって、言っていた。

でも、俺は――！　俺はカミュにだって音楽の道を歩いていけると思う。だから、少しくらい遠回りしても、諦める必要は無いと思うんだ……」

必死な声は、最後は囁きのように熱く掠れて、僕の耳に滑り込んで来た。

いっそ、そうしてやれたら良いのに、と思う。

今からまた練習して、転科試験を受けて――ものにならないと分かっているピアノを形だけでも続ければ、ミロの罪悪感は晴れるだろう。

でも、ミロはひとつ嘘をついている。ウェルナー教授が、間違っても、この期に及んで「合格しても」などという仮定を口にする筈がないと、僕は知っていた。

最終学年での、転科を禁じる規則はない。けれど、それを許すほど、クィーンズベリの教授陣は無能でも無知でもない。

時間は誰の上にも平等に過ぎていく。ミロが僕に与えられていると信じる時間は、その他の全てのピアノ科の学生にも等しく与えられている。それが全ての答えだった。

「ありがとう」

僕は、深く息を吸って、ミロから離れた。もう、決着をつける時がきたのだ。

「……その迷いのなさが、ミロの強さだな……。でも僕は、まだ迷っている。そして、プロの演奏家の世界は、迷う僕ではとても届かない世界だって知っている。

分岐は、一つじゃなかったんだよ、ミロ。僕には、プロを目指す機会がこれまでに無数にあった。その全てを、僕はその迷いで潰したんだ。君の行動を勝手に誤解して、自信をなくした。それは事実だけれど、ただそれだけのことなんだ。君は、自信なんかなくたって、真っ直ぐに顔を上げていた。筆記試験の会場で、君のその迷いのない姿を見たときに、僕は本当に君の気迫とその美しさに打たれたよ。そして、君にあまりに遠い自分の不純さを恥じた。当たり前だ。あの場まで来て、まだ迷っている人間なんて一人も居ない。どんなに自信がなくても、自分の全部を将来の夢にかける覚悟が出来ている人ばかりだったんだ。僕は……あの場に相応しくないと思った。そして、今も迷いながら、何度考えても、辿りつく結論は同じだって知っている。今日君にそう誘ってもらえても、明日の僕はきっと今迄と同じ答えを出すだろう。……だから、これで良かったんだ」

ずっと考えていた言葉をミロに伝えて、それを一度も問えずに言えた自分を少しだけ誇らしく思った。

これでいい。これを、一生かけて、僕の真実にしよう。

そう決めてしまったら、不意に、押し込めていた感情が息を吹き返した。

愛おしくて、愛おしくて、大切な、僕の想い人。

「……君が、音楽を続けてくれることが、僕にとって一番大切なことだった。そのために、僕は君を騙しもしたし、最後には裏切った。……本当は、殴られるべきなのは僕の方だ。本当

に、どうでも良かったんだよ。それ以外のことは。君が悲しむことも知っていたし、それをずっと背負っていかなくちゃならないことも分かってやったんだ。……僕がしたことは、君が思っているほど綺麗なことじゃない。ただの、僕のエゴイズムで……でも、それでも」

言って、どうなることでもない。ミロはきっと、その言葉の本当の意味までは理解しない。けれど、全てを飲み込んでしまった後で、どうしてもその一言だけは、押し殺す事が出来なかった。

「……本当に、人の執着ってどうしようもない……」

急に溢れた言葉は、そのまま僕の涙腺を刺激して、飲み込みきれなかった涙が溢れた。

「……君に、一生僕のことを覚えていて欲しかった。……負い目でもいいから……」

ミロはきっと、何を馬鹿なことを、と思っているだろう。忘れるはずがない、と。

でも、ミロは、きっと忘れる。大学で別れ別れになり、生きる世界も変わって、時が経つにつれ僕のことを思い出す事も少なくなり――

いつか、僕のことは楽しかった学生時代の記憶の一こまになり、今こんなに心を痛めた事も淡い思い出に変わるだろう。

それが、生きる世界を分けるということだ。

あるいは、僕が転科を止めた本当の理由を言えば、ミロは僕のことを生涯、強く思い起こしてくれるのかも知れない。

ただ、過ぎ去った思い出として時折思い出すのではなく、思う度に、忘れられない痛みを伴って。

けれど、そうまでしてミロを僕に縛り付けることは、結局僕にはできなかった。

それならせめて、綺麗な想い出を残したい。このクィーンズベリを卒業するまで、ままごとでも良いから、ミロに幸せだったと思って欲しい。

「キスしてもいい？」

ミロが、漸く微笑みを浮かべて、そう訊いた。

なんて無邪気な言葉だろう。僕はミロにキスをするのに、そんな事を尋ねる気もなかったというのに。

きっと、かつてサガ先輩にも、そうやって頬を染めて許しを願ったのだろう。

「今度は、ちゃんと応えてくれるのかな？」

ミロの熱がどの程度のものなのか確かめてみたくて、僕はそうミロをからかった。けれど、ミロは真剣な表情で、じっと僕を見詰めただけだった。

ゆっくりとミロの顔が近づき、僕の唇に柔らかい唇が触れる。本当に触るだけの、祈りのような、誓いのようなキス。

やっぱり、という思いと、それから、本当はそれ以上には進みたくないのじゃないか、という怖れが混じり合って、一瞬、どう反応してよいのか戸惑った。ミロの好意は感じるけれど、正直、これまでにもミロからそれ以上の熱を感じたことはない。僕のキスを知っても、こんなキスを返してくるなら、それは多

分プラトニックでいたいというミロの希望なのだろう。
「……そういうので良いんだったら、ちょっと僕が思っているのとは違うかな……」
想いの種類が違うのなら、余計な期待は抱きたくなかった。そのくらいなら、今振られた方がいい。
「嫌ならはっきり言って」
本当は、僕だってフレンチ・キスの経験なんてない。キスが気持ち良いことを知っていたわけでもない。
それでも、勝手に体は動いた。
ミロの首に両腕をかけて、目を閉じて顔を近づけた。薄く開いた唇を舌で割り、その奥に隠れている歯の隙間から舌を射し込んで、逃げようとするミロの舌に絡ませた。
どうしても近づきたい、ただ触れるだけでは済まないと激しく焦がれる思いがあって、それがこんな形になるのだと知った。相手の口の中を舐め回すなんて、冷静に考えたら気持ちがいい筈がない。それでもそうしたいと願うのは、それが皮膚という個人と外界を隔てる境界より内側に入るための、数少ない手段の一つだからだ。好きな相手の内部に入り込みたい、相手にも自分の内側に侵入して来て欲しい、と願わなければ、こんな事気持ち悪くてやっていられない。
同じようにミロが感じてくれたら、どんなに幸せだろうと願う一方で、そうではない現実に胸が凍る。
嫌われてもいい、と覚悟の上のキスは甘いものにはなりようがなくて、ミロの体がびくりと震えて後ずさった。
やはり、駄目かも知れない。
諦めて、唇を離そうとしたその瞬間、急に、息がつまるほど強く抱き締められた。
ミロの舌が僕の舌を舐め返したのを感じた。その遠慮がちな動作に、ミロの義務感が宿っていた。
本当に、相手に焦がれて抱き締める腕やキスは、分かる。以前、そんな事を言った人がいた。その時はわからなかったその言葉の意味を、体で理解した。
本当は、ミロは怖いのだろう。
同性の僕から、こんな執着を向けられて。
自分が守らなければ。
傷つけた分だけ、自分が愛さなければ。
そんなミロの声が、聞こえるような気がした。
そんな無理をして、僕に合わせなくてもいいのに。気のすまないものを義務感で付き合ってもらっても、嬉しくない。
そんな意地を張ってみても、それだけの覚悟をするほどミロが僕のことを大切に思ってくれているという、たったひとつの紛れもない真実が、泣きたいほど嬉しくて……
僕は結局、そのぬくもりを手放せず、次第に深くなってゆくキスに溺れた。

暗闇の中、光の見えない道を、重い足を引きずって歩く。
一歩一歩、時に身の内に抱え込んだ怪物に押し潰されそうになりながら。
けれど、そんな今も、一刻一刻と未来から過去へ変わっていて……
僕とミロは相思相愛となり、少しずつ別れてゆく道を、二人で並んで歩く。
昔は手を伸ばせば簡単に触れ合えた距離が、時間が経つごとに遠くなって、もう精一杯に腕を伸ばさなければ届かない。
あと一年。
それが過ぎたら、もう手を伸ばしても届かない道を辿って、お互い一人で歩んで行かなければならない。

皮肉なものだ。
僕の中の怪物だけが、一番最後まで僕と共に歩み続けるのだから。
時折、僕の先に続く道のあまりの遠さに呆然とする。
何時まで、この重荷を抱え続ければいいのか。
もし、死ぬまでこの怪物と付き合わねばならないのなら、何時、僕の道は終わってくれるのか……。
死にたいほどつらいわけじゃない。それでも、いつの日か、僕がこの怪物を抑えることに疲れてしまって、周囲も、僕自身も巻き込んで全てを不幸にしてしまうかもしれない。それが怖い。
けれど、恐怖しても、絶望しても、過ぎていく時間は変わらなくて、やがて一つの答えに辿り着く。
今日も一日、なんとか持ちこたえて歩いて来た。それなら明日も、同じだけ歩こう。
先の光が見えなくても、道のりの遠さに絶望しても、明日一日なら、きっと挫けず歩いてゆける。
いつか、この怪物が僕の中でひっそりと息絶える日が来ることを願いながら……
僕は、明日もこの道を、焦らず、たゆまず、歩いていこう。